

「間違つてゐない」

と僕も釣り込まれて、つい聲を蹴ました。折からコツ／＼と戸を叩く音。純子さんが頃合を見計らつて出動したのだつた。

「お入りなさい」

と請じて、僕は自分ながら聲の急變化に氣がついた。少し疚しく感じたが、無論そんなことは色に現はさない。

「此方でございますの？」

と純子さんはお茶を入れて來たのだつた。いつもなら夜分は女中の役だ。

「丁度好かつた。稻垣君に取つ占められてゐるところだ」

「まあ／＼」

「加勢をしておくれ」

と光岡君はこの邊、矢張り大賢の出來損ひといふ印象を與へる。敵も味方も分らない。少し可哀さうだと思つた。

「何うなさいましたの？」

「美千代さんを送つて行つたのが宜しくなかつたらしく」

「でも日が暮れてからお一人ぢやお歸し出來ませんわ」

「稻垣君はそれが分らない。婦人と交際したことがないから無暗に嚴格だ。美千代さんが冗談を言つたのに、侮辱だと言つて憤つてゐる」

「そんなことございませんでせう」

「いや、誤解してゐるんだ」

「侮辱なんてことは絶對的にございませんわ」

「矢つ張りお前は分つてゐる」

「けれども、あの方、御遠慮なしでございますからね。私、側から聞いてゐて、ハラ／＼致しますの」

「それはお前と違つて、世間が廣いから、人間が擲けてゐるんだよ」

「世間を飛び廻つてゐるんですわね」

「うむ。社交家だ」

「稻垣さん」

と純子さんは僕の方へ向き直つた。共力して責め立てようといふ意味らしかつた。

「はあ」

「私、親類の端くれですから辯解するんぢやありませんが、美千代さんはあれ丈けの人よ。何んなことを仰有つたか存じませんが、あなたを侮辱なんてお考へは決してございませんのよ」

「僕、別に問題にしてゐるんぢやありません。お話の序に申上げた丈けです」  
「蠅よ、美千代さんは」

「はあ？」

「蠅よ。世間を飛んで廻る蠅よ。それですから、間違つてあなたのお顔に止まつたんですわ」

「ハツハ、ハ、」

「純子、お前はおれを侮辱するのかい？」

と光岡君は怖い顔をした

「何故？ 兄さん」

「間違つてといふと、おれの顔に止まるのが當り前のやうだ」

「然うぢやありませんの？ 兄さんは美千代さんなら、何んな失禮なことを仰有つても、笑つていらつしやるんですもの」

「おれだつて憤ることがあるよ」

「あるもんですか？」

「いつかなんか、叱りつけて泣かしてしまつたぢやないか？」

「あのまゝにしてお置きになれば宜かつたんですけれど、直ぐ後から又御機嫌取りですもの。増長し切つてゐますわ、この頃は又悉皆然りが戻つてしまつて」

「しかし親類だもの。始終遊びに来るんだから」

「親類で始終遊びに来る方が他にもございますわ」

「それはあるさ」

「でも待遇が違ひますわ」

「男だもの、皆、女なら婆さんだ。罷り間違へば小言の一つも言はうつて連中ばかりだ」

「若い女性もございますわ」

「なうよ」

「ありますわ」

「少くともおれの書齋へ入つて来る若い女性はなう」

「若い女性よ。親類も極く濃うのよ」

「誰だい？」

「麴町の姉さん」

「馬鹿ー」

「オホ、ハ、ハ、」

「姉さんと話をして何が面白い？」

「あゝいふ氣品の高い方はいけませんの？」

と純子さんはナカ／＼やる。

「氣品ぢやない。あれは氣位ばかり高いんだよ」

「でも氣位の低い美千代さんに較べますと、餘り待遇が違つて、私、お氣の毒でなりませんわ」

「姉さんはおれの顔を見ると目の仇のやうにお説法をする、煩さいから敬遠してやるんだ」

「でも兄さんをお大切と思つていらつしやればこそでございませう？」

「おい。お前までお説法をするのか？」

「いゝえ」

「この屋敷は矢つ張り狸が祟つてゐるんだ。煩さい！」

「ハツハ、ハ、」

と僕はつい笑ひ出してしまつた。

「兄さん」

「何だい？」

「私、本氣で申上げてゐるんですから、お憤りになつちや厭よ」

「憤りはしないが、お前は妹だ。分を考へなければいけない」

「考へますから、美千代さんと同じ待遇にして戴けません？」

「何ういふ意味だい？」

「私、學問でも人格でも器量でも、美千代さんに負けない積りよ。權利がありますわ」

「何の權利だい？」

「思ひ通りを申上げてでも叱られない權利」

「申上げろ、勝手に」

「美千代さんは學校時代に先生の黒表に載つてゐた方よ」

「もう分つた。お前は稲垣君と申し合せて、美千代さんを排斥するんだ」

「そんなことございせんわ」

「いや、姉さんに頼まれてゐるんだ」

「嘘よ」

「いや、分つてゐる。腰の強いところを見ると、背景にお母さんがゐるんだ。お父さんもゐるだらう」

と光岡君、今度は何うやら大賢振りを發揮した。

「オホ、ハ、ハ、」

「見ろ！」

「お芝居は出来ませんわね」

と純子さんは脆かつた。

「豪いよ、君は矢つ張り」

と僕が後を受けた。

「馬鹿にするな」

「いや、明察恐れ入る」

「煽てには乗らない」

「本音だよ」

「何うせ誰かの差金さ。得たり賢しで、純子まで妙に高壓的に出て来るんだもの、直ぐに分る」

と光岡君は思ふ壺だつた。一本釘を打つて置く爲めには両親の干渉を認めさせるに限る。對等者の議論では權威がないから長続きがしない。

「然う氣がついたら、御心配をかけないことだ。親思ふ心に勝る親心。あれは確か吉田松陰だつたら」

「矢つ張り説法狸だ。もう否定はさせないよ」

「しかし善意は諒としてくれるだらう？」

「うむ」

「純子さんに感謝し給へ」

「宜いよ、兄さん」

と純子さんが遮つた。

「感謝なんかするものか？ 宜いよなんて、増長しちや困る」

「それですから期待してゐませんわ、手を取つてお禮を言つて戴くことなんか」

「厭味だね」

「本音よ」

「言はないから大丈夫だ」

「將來お憤みになつて親姉妹に安心させて下さるのが何よりのお禮でございませう？」

「驚いたね、これは」

「オホ、、、」

「お前もナカ／＼修業が積んだ。褒めてやる」

と光岡君は要するに僕達の忠告を甘受した形だつた。

考へて見ると、僕は矢張り説法狸かも知れない。善導に興味を持つてゐる。純子さんが退出してからも座談を續けて、忠告の徹底に努めた。學生としては學業が一番大切だ。僕は然う信じてゐるから、お互は女性の美よりも更に強い牽引力に壓倒されなければならぬと主張して、

「これだよ、君。學問だ。眞理の追究だ。これに熱中してゐれば、女性に注意を拂ふ餘裕なんかない筈だ」

といふ結論へ漕ぎつけた。

「すると戀愛は何うなるんだい？」

「今言ふ通りさ。女性に拂ふ注意なんてものがない」

「戀愛は無用といふ主張か？」

「無用でも有用でもない。問題にしないんだ」

「しかし戀愛は人生の大事實だぜ。無視することは出来まい？」

「無視するんぢやない。氣がつかないんだ。但し學生としてだよ。卒業してしまへば、又方針が變るかも知れない」

「方針上氣がつかないといふのは意志が働いてゐるんだ。本當に氣がつかないんぢやないだらう？」

「氣がつかないのさ。眞理の追究に没頭してゐれば、そんな餘裕はない筈だもの」

「ゐればと言ふなら、若しゐなかつたら何うなる？」

「ゐなかつたら、學生の自分に背く」

「これは中學生の議論だ。廣く人生を考へて見給へ。僕達のやうに丁年に達して學校へ通つてゐる人間は極く少數なんだから」

「しかし學生は學生としての立場から考へるのが一番近道だらう？ 態々問題を紛糾させる必要はない

51

「逃げたね」

「いや、單に表現の都合だ」

「それぢや結婚は何うなるんだい？」

「無論するさ。しかし卒業してからの話だ」

「學校に囚はれてゐるんだね。學校つてものは人爲的過程に過ぎない。小學校丈けでお仕舞ひにする人間が大勢あるんだよ。君は案外頭が悪いんだね」

「それぢや學生に選舉權のないのは何ういふ次第だらう？」

「来たね？」

「参つたらう？」

「選舉權も人爲的の規定に過ぎない。野蠻國には絶対にないんだから」

「逃げたな」

「しかし野蠻國の話ぢやない。結婚の問題だ」

「ひどい詭辯だね」

「君は戀愛のない結婚つてものが想像出来るのか？」

「出来るとも。目が覺めて見たら結婚してゐたといふ程度でも相應圓滿にやつてゐる」

「しかし戀愛のある結婚の方が戀愛のない結婚よりも幸福だらうとは思はないか？」

「然ういふことを思ふのが邪道さ。學問に熱中してゐれば、戀愛なんてことを考へる餘裕がない。しかし學業を怠つてゐると、心に間隙があるから、妖魔が食ひ込む」

「お修身の講義つて批評が當つてゐるよ」

「閑があると、餘計なことを考へる。小人閑居戀愛を夢みる。戀愛のない結婚は想像がつかないなんて理窟をつける奴に限つて、學校の成績は香しくない」

「君は學生つて頭が抜けないんだね、何うしても」

「仕方がないさ。學生だもの」

「それちや學生としてお相手をしよう。當り前の議論ちや程度が高過ぎて頭の上を通り越してしまふやうだから、君の日常生活に即した極く卑近なところを行くぜ」

「何處からでも來給へ」

「君は學生として戀愛を感じたことはないか？」

「學生だから、そんなことを感じてゐる閑がないんだ」

「日本語が分らなくちや困るね。閑ぢやない。戀愛を感じたことがあるかないかと事實を訊いてゐるんだ」

「そんな經驗は樂にしたくてもない」

「一體君は何ういふことが戀愛か分つてゐるのか？」

「分つてゐて陥らないのが修養だ。僕だつて木石ぢやない」

「一寸告白したぜ」

「君とは違ふ」

「それちや戀愛とまで行かなくても、或女性を念頭に置いたことはないか？」

「ないね」

「然う誓へるかいい？」

「誓へるとも、學生は學問が本分だ。餘念なし。二念なし。君も學生生活を續ける間は僕を學んでくれ。處世の眞諦は極く平凡なところにある」

二人の遣り取りを書いて行けば果しがない。僕としては大説法の一晩だつた。光岡君は竟に鳴りを静めた。僕は比較的流暢の方だ。喋り負かした形もあつた。

「今夜は散々にやられた。失敬して、もう寝ようか？」

と光岡君立ち上つた。その折、僕の机の上から赤い紙を取つて、手早くポケットへ忍ばせようとした。しかし大きいから入らない。僕は舉動不審と思つて、

「何を持って行くんだい？」

と訊いて見た。

「吸取紙さ。後日の爲めに貰つて置く」



「さあ」

「あれはこそ純子さんくくくだ」

「それは同じ家にゐて始終顔を合わせるから、多少はあるかも知れないけれど」と僕は漸く口がきけるやうになつた。

「戀愛は先づ念頭へ来る。何かにつけてその人を思ひ出すのが初期だ」

「ふうむ」

「次に切つかけなしでも顔が目の前へ浮んで何となく明るい心持になる」

「君は経験が豊富だらうからね」

「相手の名前を無意識的に書くやうになると、もう可なり進んでゐる。煩悶が伴ふに相違ない」

「そんな馬鹿な講解は聞きたくない」

「痛快だな。狸が尻尾を出したんだ。好いものが手に入つたよ。天は矢つ張り正義に與す。君のお説法最中にこの吸取紙が靈感のやうに目に觸れたんだ」

「君、誤解しちや困る」

「まだ恐れ入らないのかい？」

「戀愛ぢやないんだ。そんなことが純子さんの耳に入ると、僕はもうこゝにゐられない」

「無論含んで置くよ」

「君は自分の都合上戀愛と斷定したいんだらうが、僕は友愛だと思つてゐる。親切にしてくれらるんだから」

「駄目だよ。友愛なら僕の名前を書く筈だ。然う躍起になつて否定しなくても宜からう。僕は何も問題にしてゐるんぢやない」

「弱つたな、これは」

「狸が一つ穴の貉になれば宜いんだ。元來狸と貉は同じものだつてぢやないか？」

「参つた」

「到頭兜を脱いだね」

「いや、承認したんぢやない。困つたといふ意味だ」

「兎に角、僕はこの吸取紙を買つて行く。一つぐらゐ君の弱點を握つて置かないと息がつかない。失敬したよ、大いに」

「まあ宜いだらう？」

「いや、もう晩ご」

「しかし兎をつけないといけない。僕は變に思はれたまゝぢや困る」

「石を投げなければ宜いんだよ。お互硝子の家に住んでゐる人間は」

「うむ？」



「お休み」

と光岡君は凱歌を奏した積りだった。

この問題は以来そのまゝになつてゐる。僕も再び辯明を申出ないが、光岡君も何とも言はない、しかし善導係の権能が或區劃丈け制限されたことは事實だ。硝子の家に住むものは石を投げない。光岡君から申渡されたこの諺が兎角僕を撃射した。僕は以前ほど思ひ切つたことが言へなくなつた。もう一方、念頭の純子さんも矢張りそのまゝだ。念頭以上に一向發展しないのだから構はない筈だが、何うも周囲へ遠慮がある。吸取紙一枚でこんなに自信力がぐらつくところを見ると、僕も大した人格者ぢやないらしい。

美千代さんは相變らず遊びに來た。純子さんに電話をかけて前知らせをするけれど、來れば直ぐに光岡君の書齋兼畫室へ入つてしまふ。純子さんはダシに使はれる上にお相伴を餘儀なくされるから反感が募る。美千代さんは策がない。

「お兄さま、私、お約束の肖像畫を描いて戴きますわ。毎日でも來て坐つて上げますから」と恩に着せた依頼をしたのは、僕が忠告してから間もないことだった。

「畫料次第で引受けませうか？」

「あら！ もう玄人の積り？」

「玄人跣足です」

「素人跣足の方でせう」

「敵はないな」

「オホ、」

「畫料は箱根までドライブ」

「O・Kよ。いつ？ 何なら前金で戴きますわ」

「今度の日曜」

と光岡君は一向忠告が利いてゐない。ドライブは天氣の都合でお流れになつたが、肖像畫は直ぐに始まつた。美千代さんは毎日通ひ続けた。

「君、宜いのかい？」

と僕も黙つてはゐられない。

「何が？」

「この間の話は僕丈けの考へでなくて、お父さんお母さんの御意向だから、畫室でキヤツ／＼と餘り騒がない方が宜いだらう？」

「大丈夫だよ」

「純子さんが又心配するよ」

「描いてしまへば厄拂ひさ。僕だつて考へてゐる」

と光岡君は性根のあるやうなことを言つた。

僕は純子さんの相談を怠らない。それが唯一の交渉だ。

「駄目ね。些つとも利き目が見えませんか」

と純子さんは完全に驅除する積りだから、短兵急だつた。

「いや、多少考へてゐるやうです」

「でも毎日よ。以前より悪くなつてしまひましたわ」

「その代り時間が短いです。繪そのものゝ興味も手傳つてゐるんでせう」

「念の爲めもう一週申上げて戴けません？」

「さあ」

「私も及ばずながら御加勢致しますわ。又十字軍よ」

「しか一別に目に餘るやうなこともないんですから、形勢観望で宜いでせう」

「観望はもう充分させられてゐますわ。出動の必要がございませう？」

「さあ」

「辭になりますわ。寧ろこの間の當てつけちやございませんか？」

「それほどの考へもないんでせう。肖像畫は以前からのお約束でしたから、言責を果してゐるのから知れません」

あなたは何だかお弱くなりましたのね。一々兄の辯護をしていらつしやいますの？」

「そんなこともない積りですけど、差當り同じお説法を繰り返すのは考へものです。憤慨して反動を起すと困ります」

と僕は兎角消極方針に傾く。尤もこれは美千代さんの問題に限る。他のことでは収取紙を取られてゐないから遠慮をしない。但し喧嘩にならない程度を厳守してゐる。以前は言ふことを聞かなければ本郷へ歸ると言つて脅かす手があつたけれど、昨今はそれを使ひたくない。歸れと居直られた場合に困る。念頭の問題がある。硝子の家に住んでゐる人間は實際思ひ切つて石を投げる事が出来ない。

### 侮り難い敵手

美千代さんほど頻繁ではないが、相原のケンさんも時々やつて来る。光岡家は人の出入りが多い。しかし他の連中は差當り問題でない。美千代さんが純子さんをダシに使つて光岡君の書齋へ入り込むと同じやうに、ケンさんは表面光岡君を訪ねて来て、純子さんの御機嫌を伺ふ。親類だから、伯父さん伯母さんに託ける法もある。伯父さんの會社に勤めてゐる關係上、社員の資格を利用することも出来る。手段が豊富だから、うっかりしてゐると出し抜かれる心配がある。

光岡君の定義によると、戀愛は先づ念頭へ来る。その人が常に念頭を占領してゐるやうなら、心がその人に傾いてゐるといふのである。ツラ／＼考へて見て、光岡君の言葉に眞理の裏打ちのあること

を発見した時、僕は愕然として目が覚めた。これはいけないと思つた。但し以來慎重といふ意味ではない。念頭の人の名前を文字に書き現すやうになれば、もう可なり進んでゐる。これも光岡君の金言が實際を道破して餘蘊なかつた。學生には學生の本分がある。しかし學生も同時に人間だ。人生の大事業には壓倒される。然ういふ意味から愕然として目覚めて、ケンさんを侮り難い敵手と認められたのである。

純子さんの意向は分らないが、ケンさんは光岡氏にもお母さんにも信用がある上に、麹町の義兄に取り入つてゐる。その他に有力者があるなら、それにも渡りをつけてゐるに相違ない。僕は光岡君丈けが味方だ。しかしその光岡君に大きなことを言つてあるから、相談を持ちかける次第に行かない。便宜は計はないと申渡されてゐる。異存はないから自力でやれといふ意味だ。僕は鐵砲を打つても宜いのでけれど、火薬と弾は貸して貰へない。狙ひ方も自分で工夫しなければならぬ。

斯う考へて見ると、ケンさんも同じ立場にゐるのらしい。僕はケンさんの素性を光岡君に訊いて見たことがある。矢張りあの頃から氣になつてゐたのだ。何ういふ親類だと立ち入つたら、美千代さんの親類だから親類の親類の親類だらうと答へた。親類が無暗に多いといふ話になつて、煩いだらうと同情したら、待遇が定めてあると言つた。ケンさんあたりは上の部ださうだ。しかし少し野心を起して、純子さんを貰ひたがつてゐるといふことだつた。僕は才子佳人だから丁度好いと褒めてやつた。つと追究して見ると形勢が分つたのだらうに、その折は然ういふ必要を感じなかつたものだから、

そのまゝにしてしまつた。次に僕が光岡家へ移つて來た日のことだが、光岡君は僕に對する好意を寧ろケンさんの引け目になるほどまで示してくれた。ケンさんが太郎冠者云々の噂に託けて僕を貶しかけた時、光岡君は聞き直つて、高壓的に宥めた。ケンさんはあれが利いてゐるのか、以來僕を疎かにしない。顔を合せる度に鄭重な挨拶をする。僕の部屋へ寄つて話し込むこともある。

「卓爾君は何うですか？ 學校の方を勉強してゐますか？」

「いつも訊く。」

「相應のところでは？」

「實は僕も君と同じ役目を伯父さんからそれとなく仰せつかつてゐるんです」

「は、あ」

「光岡君には内證ですよ」

「何故ですか？」

「然う大勢監督がついてゐると思はせたくないです。大將、あれでナカ／＼氣むづかしいですからな」

「はあ」

「君が側についてゐてくれれば安心です。伯父さんも卓爾君には今まで随分手こすりしました。その程度僕が相談を受けてゐたんです」

「高時代に御一緒だつたさうですね？」

「はあ。僕の方は一年上でした。元來先輩です」

「僕は年も違ふし、ズツと後輩でしたから、押しが利きません」

「いや、君は僕と違つて、人格が利いてゐます」

「そんなことはありませんよ」

「しかし勤まつて行くぢやありませんか？」

「お蔭で何うにか斯うにかです」

「僕だつて会社の仲間同志では相應人格者の方ですけど、昔馴染ですから性が知れてゐます。矢つ張り魚つてもものは餌が珍らしくないと食ひついて來ません」

「ハツハ、ハ、」

「此奴は又いつもの蚯蚓だつて次第です」

「ハツハ、ハ、」

と僕は笑つて受け流した。僕は光岡君の機嫌を取る氣は些つともないのだが、ケンさんは自分の心持から推して然う思つてゐるのだらう。

「しかし君は沙蠶です」

「は、あ」

「少くとも人格者と誤解されてゐる。ハツハ、ハ、」

「ハツハ、ハ、」

「巧い洒落でせう」

とケンさん、矢つ張り性が悪い。チク／＼やる。

「誤解ですよ、人格者なんてことは、全く」

「いや、僕とは信用の程度が違ひます。卓爾君に思ひ通りのことを言つて憤られないのは恐らく君丈けでせう」

「それは然ういふ條件で來てゐるんです」

「僕だつてこれで相應爲めになるやうな忠告をしてゐるんですけど、何だ？ ケン公が」と頭ごなしです」

「我儘がありますからね」

「ありますとも。我儘一杯のお坊つちやんです。あれで世間が通つて行くなら樂なものです」

「通りませんよ。到底」

「その邊を納得させることが急務です。大いにやつて下さい。僕も及ばずながら時々見廻りに來ますから」

「何分宜しく」

と僕は謙譲の態度を忘れない。兎に角、萬事につけて先輩だ。差當り下から出て様子を見ることにした。

ケンさんはその都度純子さんの方へ話題を導く。矢張り念頭にあるから、自然黙つてゐられないのだらう。文字に書き現す程度に相違ない。しかし甚だ婉曲だ。純子さんそのものとしては語らない。周囲の人達に關聯させる。

「伯母さんも心配してゐます。何しろ獨り息子ですからね」

と光岡君の問題を續けながらも目的は純子さんにある。

「はあ」

と僕は調子を合せるけれど、もうソロ／＼だらうと思つてゐる。

「それは姉さんや妹さんがありますけれど、男としては卓爾君が大光岡家の純然たる一粒種です」

「兄さんがあつたんでせう？」

「さや」

「あつたんですよ。二つか三つの時亡くなつたさうですけど」

「然うですかね」

とケンさんは首を傾げた。斯ういふことを知らないところを見ると、矢張り親類の親類の親類だらう。僕はこんな消息に通じてゐるのを誇りとするのでもないけれど、一日の長があるやうに感じた。

人格者も境遇に支配される。競争者と同じ地盤まで引き下げられるから情ない。

「女の中の男です。我儘息子としての條件を具備してゐます」

「姉さんは持て餘してゐますよ」

「少しお小言が過ぎるんぢやないでせうか？ 光岡君だつてもう子供ぢやないんですから、相應考へ

がありません」

「しかし連れ添ふお婿さんを侮辱されれば、黙つちやゐられないでせう？」

「あの件は僕が仲裁して、もう事済みになつてゐます」

と僕はつい主張した。

「去年中の仲違ひですか？」

「はあ。光岡君が組みついた一件です」

「違ひますよ。又問題が起つてゐるんです」

「はあ」

「善導係が時世に後れちや困りますね。僕は會社で兄さんから聞いたんです。寧ろ聞かされたんです」

とケンさんも主張だつた。兄さんとか姉さんと伯父さんと伯母さんとかと如何にも肉親のやうに言

ふ。

「これは驚きましたな」

「この間卓爾君が麹町へ見えたるさうです。いつにないことだと思つたら、御無沙汰のお詫でした。そこまでは申分ないんです」

「成程。麹町へ行つて来たと言ひましたよ」

「一年以上も仲違ひをしてゐたんですから、弟としては挨拶に上るのが當り前です。兄さんも姉さんも満足でした。しかし純子さんのこともあつたんです。純子さんの縁談については考へがあるから一切世話を焼かないで下さいといふ註文だつたさうです。兄さんは兎に角、姉さんはその爲め奔走してゐる矢先ですから、好い心持はしません。一體、卓爾君は高壓的です。あれが悪い癖です」

「確かにその傾向がありますね」

「同じことでも婉曲に言へば、相手の感情を害さないで済むんです」

「姉さんがお憤りになつたんですか？」

「はあ。しかし稀に來た弟のことだと思つて、虫を殺してゐました」

「あの姉さんとしては上出来でした」

「稻垣君、君は何うも卓爾君の肩を持ち過ぎる」

「そんなことはないです。しかし姉さんだつて光岡君の姉さんですから、多少似通つたところがありますよ」

「剽悍決死ですか？」

「ハツハ、ハ、」

と僕は然り認めた。

「無論強い方です。兄さんを完全に下敷にしてゐます。兄さんは女婿だから仕方ありません」

「ハツハ、ハ、」

「又女婿的に出来上つてゐます。濃厚そのものです。お父さんの會社へ勤めるのは考へものですか。出世は早いでせうが、内外で頭が上りませんから、昨今、神經衰弱の氣味です」

「まさか」

「いや、本當ですよ。會社でお父さんに叱られる上に、家へ歸つて剽悍決死に奉仕するんですから、根が盡きませう。神經衰弱を催すのも無理はありません。そこへ持つて行つて卓爾君が失敬なことを言つたんですから、憤つてしまつたんです」

「何を言つたんですか？」

「兄さんはもう少し自然に歸らないと神經衰弱になりますと偶然問題に觸れたんです。いや、自然ぢやない。天真だつた。天真に歸れといふ忠告でした」

「天真爛漫ですか？」

「然うでせう。その意味でも言ひ方によつては感情を害しますよ。假に僕が君に向つて、天真爛漫に

「歸り給へ」と忠告したら、君は氣持を悪くするでせう！」

「さあ」

「技巧を弄し過ぎるといふ意味になりますからね」

「しかし然ういふ忠告は誰にも必要ぢやないでせうか？ 文明人は天真から遠ざかる傾向があるんですから」

「それは學生の空論ですよ。作文に書けば點を貰へませうが、社會はもつと複雑してゐます」

「議論ぢやないです。その天真論が何うなつたんですか？」

「兄さんが天真の意味を訊いたんです。卓爾君は生れた時の心持、いや、違つた、兄さんの生れたままの心持に歸れば宜いんですと答へました。尙ほ註解して、要するにボンヤリしてゐれば宜いんですと言つたさうです。即ち兄さんは生れつき人間がボンヤリだといふことに歸着します」

「しかしそれは偶然さういふ變な意味に歸着したんでせう」

「偶然にしても歸着は歸着です」

「冗談かも知れませんよ」

「少くとも兄さんは冗談と思つてゐません。矢張り性根が直らないと言つて、憤つてゐます」

「眞面目一方の人ですからね、あの兄さんは、頭が堅過ぎますから、光岡君の含蓄が分らなかつたんでせう」

「天性ボンヤリだといふのが含蓄ですよ。そんなことを言はれれば誰だつて腹を立てますよ」

「ボンヤリだと思つてゐれば、そんなことは却つて口に出さないでせう」

「いや、卓爾君は思つてゐることをそのまま發表する人です。元來兄さんに敬意を持つてゐないんですから」

「冗談でせう、矢つ張り」

「それぢや純子さんの方は何うですか？」

とケンさんはもう目的地に達してゐた。

「何ですか？ 純子さんの方つて」

「姉さんが縁談を心掛けて下さるんですから、委せて置けば宜いでせう？ 態々斷りに行くのは何ういふ次第ですか？」

「そんなことは僕には分りません。光岡家の都合でせうから」

「單に卓爾君の都合でせう。勘明では然う認めてゐます。卓爾君の感情問題で運命を左右されるんぢや純子さんが可哀さうだと姉さんが仰有つてゐました」

「感情問題つてこともないでせう」

「それぢや何がありますか？ お父さんお母さんのお考へで縁談が始まつてゐるんですか？」

「ああ」

「卓爾君が乗り出して来て断るからには卓爾君に何か心當りがあるんでせう？ 現に考へがあるから世話を焼かないでくれと高壓的に言つてゐるんですから」

「僕、然ういふ問題は一向分りません」

「しかし始終こゝにいらつしやるんですから、多少形勢がお分りでせう」

「駄目ですよ、僕は、光岡君の註文通り、生れたまゝの心持でゐるんですから。ハツハ、」

「誰か遊びに来る人があるんですか？」

「さあ」

「純子さんのところへです」

「ありますよ」

「誰ですか？」

「美千代さんです」

と僕は諷つてやつた。

「いや、男性ですよ、若い人で」

「あるかも知れませんが、此方は別世界ですからね。僕には分りません」

「實は僕、兄さんと姉さんから調査を頼まれたんです。果して卓爾君の言ふ通り、此方に心當りがあるか何うかとその邊をそれとなく……」

「それとなく頼まれたんですか？」

「いや、それとなく調査するやうに頼まれたんです。ついては君に頼るより外ありません」

「僕は何うすれば宜いんですか？」

「詰まりですな、純子さんの縁談の候補者らしいものを探索して貰くんです。麹町では無論お父さんお母さんに頼まれてゐるんですから、卓爾君に横槍を入れられると困るんです」

「すると僕は探偵ですか？」

「先づ然うです」

「御免蒙ります」

「屹度然う來ると思ひました」

「厭ですよ、探偵なんて」

「探偵といふと語弊がありますが、僕がその都度お尋ねすることに答へて下されば宜いんです。僕の顔を立てゝくれませんか？」

「何うして立てるんですか？」

「實は僕、稻垣君と懇意ですからつて、二つ返辭で引受けて來たんです。單に然ういふ候補者があるかないかといふこと突き止めるだけの役目ですから、君が直ぐに承知してくれると思つたんです」

「そんなことなら、姉さんがお母さんに、直接伺へば分りませう」



「いや、卓爾君の方寸です。これはお母さんにも分りません。お母さんだつて卓爾君には遠慮していらつしやるんですからね」

「僕の見えてゐる限りでは候補者なんてものはないやうですよ」

「しかし卓爾君は考へがあると言つてゐるんですから、然う簡單には定められません。探索といふと面白くありませんから、研究としませう。僕も無論手傳ひます。二人で研究しませう。即ち卓爾君の方寸の中とお父さんお母さんの慎重な御考慮以外に候補者らしいものがあるかといふ問題です」

とケンさんは禁獵區を制定して、僕をウマ／＼その中へ、封じ込む料簡だ。

「成程」

「お分りになりましたか？」

「はあ。及ばずながら心掛けます」

「何うぞ」

「光岡君に直接訊いて見るのも一つの手段でせう」

「いけませんよ。僕が兄さんや姉さんから頼まれてゐることは絶対秘密です」

「は、あ」

「元來卓爾君が意地になつて横槍を入れるんですから、そんな畫策が知れようものなら、大問題が起

ります。この點はクレクレもお含み下さい」

「それぢやそれとなく心掛けて置ませう」

「何分宜しく」

「承知しました」

と僕は引受けた。先方が手を使へば、此方も手を使ふ。一段上を行つてやる肚だつた。

純子さんはケンさんのことを妖魔の手先と言つたことがある。僕の記憶にして誤りなくんば、その折僕はケンさんの爲めに辯解の勞を執つた。

「青年紳士の模範です」

と褒めて人格者として人を疑はない氣宇を示すと共に氣を引いて見たら、

「まあ、御最良ね」

と純子さんは一笑に附じた。あの頃の態度でゐてくれると心配はないのだが、昨今は少し違つて來た。ケンさんは矢張り機敏だ。手近にゐる僕よりも、遙か遠方から深く取り入る法を知つてゐる。

「純子さん、妖魔さんは相變らずお見えになりますか？」

と或日ケンさんが訊いたのである。

「あらまあ！」

「何ですか？」

「妖魔さんなんて」

と純子さんは驚いた。僕も側で聞いてゐて、此奴、變だと思つた。妖魔といふ言葉は純子さんと僕と二人丈で使つてゐる。

「通俗に申上げれば、美千代さんです。美千代さんは矢張り見えますか？」

「はあ。この間中は繪を描いて戴くので毎日のやうでございました」

「御迷惑でせう？」

「いゝえ、一向」

「實は僕、麹町の姉さんに叱られたんです。僕の責任ですつて」

「何が？」

「姉さんはお年が上丈けに美千代さんのやうなモダン・ガールを理解してゐません。お河童さん即ち妖魔さんです。その妖魔さんの手引をするのが僕だと仰有るんです」

「まあ。オホ、、、」

「ひどく油を取られましたよ」

「稀には宜いでせう」

「これには差金があるんです。矢張り手引をした人があるんです」

「まあ」

「ケンさんが來たら言ひ聞かせて下さいと仰有つた方があるんです」

「オホ、、、、」

「以來僕は慎んでゐます。それですから、この頃は妖魔さんと一緒に來ないでせう？」

「然うね、然う仰有れば」

「心細いですな。折角心掛けてゐるんですけれど」

とケンさんは光岡君が一寸立つた間にこれ丈けの報告をした。妖魔といふ言葉を知つてゐるところを見ると、實際麹町の姉さんから注意を受けたのだらう。非を覺つて改めるのは感心だ。矢張り深い料簡のある男ではないと思つたが、それは僕が甘い。ケンさんは方針を變へたのだつた。目的の爲めに今まで利用してゐた美千代さんを今度は目的の爲めに犠牲にする積りらしい。

「稲垣さん、何うぞお早くお玄關へ。大變でございます」

とそこへ女中が駆け込んだ。

「何ですか？」

「若旦那さまがお喧嘩でございます」

僕は玄關へ急いだ。ケンさんも續いた。光岡君は三人の半纏着を向ふへ廻して、口角泡を飛ばしてわた。や、來たなと僕は思つた。

「何ですか？ 君達は一體」

とケンさんは僕を押し退けて進み出た。

「……………」

「面會強要ですか？ 御主人は唯今お留守ですよ」

「ケンさん、相手は僕だ。稲垣君、昨夜の連中がやつて来たんだよ。幾ら言ひ聞かしても分らない」

と光岡君は僕を見返つた。

「分らないのはあなたですよ。馬はもう御註文通り犬死をしてゐるんですから、この上お説法を聴きに來たんぢやありません。しかし紳士として人を撰つて宜いものか悪いものか、それを伺ひに上つたんです」

と一番年の多いのが辯者と見えた。

「手前の物好きで人の馬に犬死をさせる権利があるか？」

「理窟があるなら、交番へ來い。お巡さんの前で言つて見ろ」

と他の二人はボン／＼憤るばかりだつた。

昨夜十時頃に塀の外から人の騒ぐ物音が聞えたので、光岡君と僕は出て行つて見た。馬力の馬が倒れてゐた。何うしても起きない。もう氣息奄々だつた。三人の男は持て餘した結果、首を鳩めて相談をしてゐた。

「何うしたんですか？」

と光岡君が訊いた。

「病氣が起つたんです」

「助かりますか？」

「……………」

「何なら門の中へ入れて介抱してやつちや何うですか？」

「……………」

「電話をかけて獣醫を呼んで上げませうか？」

「……………」

「何うですか？」

「そんなことをしてゐる間に息を引き取つてしまひます」

「病院へつれて行きますか？」

「屠殺場へつれて行きます」

「は、あ」

「……………」

「死ぬに定つたものを屠殺場へつれて行く必要はないぢやありませんか？」

「……………」

三人は相手にならない。喘いでゐる馬に繩をかけ始めた。今まで馬の引いてゐた車に乗せて、引つ張つて行く積りと見えた。

「可哀さうなことをするんだね」と僕が囁いた。

「何うするんだらう？」

「殺すのさ」

「このまゝでも死ぬぜ」

「こゝで死なせたんぢや肉にならないから、屠殺場へ持つて行つて、息のある中に殺して貰ふのさ」

「ふうむ」

と光岡君は淋しい顔をしたが、忽ち聲を剛ました。

「君達、正義人道はそんなことを許さない。よし給へ」

「……………」

「生きてゐる間サン／＼使ひこくつて、死にかければ、殺して肉にするのか？」

「……………」

「淺ましい話ぢやないか？」

「餘計なお世話だ」

と一人が相手になつた。

「何うせ死ぬものなら、このまゝ死なせてやり給へ。僕は見るに忍びない」

「見ないで引つ込んでゐろ」

「分らないのか？ 君は」

「手前こそ分らない」

「人非人だぞ、貴様達は」

「何だ？ 人非人とは」

「正義人道は許さない。よせ」

と光岡君はその男の手を拂つた。

「俺の馬ですよ。あなたに文句のある筈はない」

ともう一人が進み寄つた。

「誰の馬でも正義人道が許さない」

「困りものだな、これは」

「兎に角、獣醫に見せ給へ。僕が電話をかけてやる」

「醫者に見せて直るものなら、あなたに言はれるまでもない。俺が呼びます」

「直らないものなら、こゝで死なせて線香の一本も上げてやり給へ。それが人情ぢやないか？」

「餘計なことを言はないで引つ込んでゐろ」

と一番遅しい男が馬から離れて来て、光岡君の肩を突いた。

「何だ」

「手前こそ何だ？」

「やるのか？」

「手前の料簡次第だ」

「斯ういふ料簡だ」

と言ふが早く、光岡君はビシヤリと相手の横面を平手で打った。相手も直ぐに打つてかゝつたが、

光岡君は軽く外して、身構へをした。

「君。君」

と僕は間に入つた。

「癖になる。止めるな」

「見つともないよ。人立ちがしてゐる」

「敢て此方からは手出しをしないんだ」

と言ひながらも、光岡君は自分が先に撲つてゐるのだ。喧嘩の名人をもつて任じてゐる丈のことがある。しかしこの上大仕掛けでやられては溜らないから、僕は光岡君を引つ張つて来た。幸ひ先方の

二人も仲間を捉へてゐてくれた。

「おれはこゝの光岡だ。文句があるなら、いつでもやつて来い」

「行くとも。覚えてゐろ」

と雙方教圍いて別れた。

それで三人がやつて来たのだつた。玄關に並んだ三つの顔は如何にも文句がありさうに見えた。

「君が相手になると、又喧嘩になる。この人達は仲直りに来たんだらうから、ケンさんと僕に委せ給へ」

と僕は光岡君に沈黙を命じて、ケンさんに夜前の一部始終を掻い摘んで話した。

「それは何うも済まないことでしたな」

とケンさんが應對に取りかゝつた。光岡君は腕組をして控へてゐる。

「俺等は地道の稼業をしてゐるものですから、因縁をつけに来たんぢやございません。そこは初めから何うぞお考へ違ひのないやうにお願いします」

と一番年上の男が言つた。

「分つてゐますよ」

「俺の馬が病氣を起して倒れたから、この次郎公と久さんに來て貰つたんです。俺等は皆この近所に住んでゐます。夜中お騒がせをして申譯ございません」

「何う致しまして」

「ところで今この人のお話しなすつた通りの譯合です。この若旦那が出て来て因縁をつけたのが事の始まりです」

「因縁ぢやない。忠告だよ」

と光岡君が口を出した。

「君は黙つてゐてくれ給へ」

「此方は忠告をされる因縁なんかないんだ」

と昨夜撲られた男が權幕をした。

「まあ、お静かに」

「次郎公も黙つてゐなさい。俺が責任だ。悪いやうにはしない。若旦那の忠告は一應御道理ですが、俺等には又俺等の考へがあります。金を出して買った馬ですよ。正義人道を言つてゐる場合ぢやありません。唯勿五分の死骸になるか、三十圓の馬肉になるか、大きな境目ですよ」

「御道理です」

「馬は到頭犬死をしました。急病でしたから、持ち込んでも間に合ひません。若旦那が因縁をつけたから兎や角と言ふのではありませんが、この次郎公があゝの経緯で若旦那に撲られてゐます。それも見物人の目の前です。このまゝ引つ込んだんぢや次郎公も世間へ顔が立ちません」

「何うすれば宜いでせうか？ 御腹藏のないところを仰有つて戴きませう」

「膏藥代なんて早合點をなすつちや困りますよ。瘦ても枯れても、地道の稼業をしてゐる人間です。因縁はつけません」

「しかし氣は心です。堅いことを言はないで一杯飲んで戴きませう」

とケンさんは好い言葉を知つてゐる。買収する積りで紙入から五圓紙幣を出した。

「それが厭だと言つてゐるんですよ。俺等は仲直りをしに來たんです」

「仲直りの志です。眞のお志ですから、御遠慮には及びません」

「早分りに遠慮のないところを申し上げますが、次郎公は横酒つ面を一つ撲られてゐるから一つで辛抱するさうです」

「はいあ」

「酒を飲まして貰つたつて高低の地均にはなりません」

「するとあなた方は喧嘩を賣りにお出になつたんですか？」

「御冗談でせう。そんな因縁をおつけになつちや困ります。賣られたのは此方でございますよ」

と相手は言葉使ひこそ丁寧だけれど、何處までもネチ／＼してゐる。光岡君はケンさんと僕の間に割り出て、

「面白い。おい、次郎公」

と呼んだ。

「何でい？」

と次郎公も進出した。

僕達は慌て、光岡君を遮らうとしたが、

「大丈夫だよ。この男と僕の問題だから、直接接衝の方が早い」

と言つて、次郎公を相手に懇談に取りかゝつた。

「撲られてやらう。しかし撲れるものならだぜ。一つ手柄にやつて見ろ」

「打つ食はせることなら引けを取つたことのない俺だ」

「昨夜取つたぢやないか？」

「あれは飴だ。宜いか？ 料簡を訊いて置く」

「宜いとも」

「それぢやその中に屹度返報をする。約束をするからには後から苦情はあるまいな？」

「念には及ばない」

「有難い。俺も光岡の若旦那を打つ食はせれば鼻が高い」

「面白い。その代り此方もお相手をするよ」

「望むところだ。斯うやつて坐つてゐるところを打つ食はしたつて張合がない。暗の晩は氣をつけて

歩け」

「毎晩散歩に出るから、門のところまで待つてゐろ」

「話が分つたらお暇だ。虎さん、切つかけをつけておくれ」

と次郎公が促した。

「お邪魔を致しました。あなた方お二人は後日の證人になって下さい。若旦那、失禮申上げました。

それぢや御免蒙ります」

と辯者の虎さんがお辭儀をした。

「待ち給へ」

とケンさんが呼び止めた。

「何でございますか？」

「これは日當だ。一杯やつてくれ給へ」

「然うですか？ 恐れ入ります」

と虎さんは手早く五圓紙幣を受け納めて、次郎公久さん諸共歸つて行つた。

「占まつたな」

とケンさんが歎息した。

「何ですか？」

と僕が訊いた。

「辞退すると思つたら、持つて行つてしまつた」

「ハッハ、ハ、」

「馬鹿だよ、君は」

と光岡君が言つた。

「歸り際に勤めたのが悪かつた」

「やりたくないものなら、出さない方が宜い」

「平に辞退して好意丈け受けてくれると思つたんだよ」

「性が悪いよ」

「一寸行き違つたんだ。デリケートな問題だからね。しかしあれで一杯やれば恨を忘れるだらうから、萬更無駄にもなるまい」

「五圓返さうか？ 氣の毒だ」

「いや、それには及ばない」

「辞退すると思つて言つたんだ」

「おや〜」

「好意丈け受けてくれ給へ」

「サント〜だな」

とケンさん、斯ういふところは好人物だ。僕は必ずしも憎むべき男でないと思つた。

光岡君は平氣だつたが、お母さんと純子さんが頻りに心配し始めた。僕は光岡君に内證で次郎公の家へ和解に行く相談を受けたけれど、光岡君は負けつこないんですからと言つて斷つた。それに何處の次郎公だか分らない。しかし僕も散歩の歸りを警戒した。門のところへ來ると思ひ出して、

「今夜も先づ無事だつたね」

と言ふのが常だつた。

「もう來ないよ。矢つ張り酒代が利いたんだらう」

「して見ると、無駄ぢやなかつたね」

「うむ」

「好い鹽梅だ」

と僕も安心して、日の立つに従つて忘れてしまつた。

ケンさんは相變らず時々やつて來る。善導上の見廻りもあるだらうが、禁獵區の監督の意味もある。盛んに純子さんの御機嫌を取る。純子さんが又餘り厭な顔をしない。此方は人格者として然う馬力をかける次第に行かないから、自然押され氣味だ。純子さんは無論僕に好感を持つてゐてくれる。しかしそれは兄さんの善導係の人格者に對する無色透明の敬意と信用かも知れない。聖人君子に祀り上げ



られてしまつては心細い。

ところで或晩、ケンさんが顔色蒼白になつて、光岡君の書齋へ飛び込んで来た。

「やられた」

「何うした？」

「次郎公にやられたサン、打ち踏された。人遠ひだ」と言ふのだつた。

「ハツハ、ハ、」

と僕はつい笑出してしまつた。氣の毒には相違ないが、懸敵の災難は決して心持の悪いものでない。「門のところで行き會つたんだ。次郎公だと氣がついた途端、人遠ひをされちや困ると思つて逃げ出したのが悪かつた。頭が働き過ぎたんだ」

「頭の自慢をする場合ぢやない。それから何うした？」

「逃げ出したものだから、先方はテツキリ君と思ひ込んでしまつた。首筋を捉へて振伏せやがつた。後はサン、くだつたよ。お話にならない」

「意氣地のない奴だな」

「僕は喧嘩は弱い。その上に君の身代りなんてことは全く期待してゐなかつたんだから」  
「身代りにやつたんだらうか？ 僕と思つてやつたんだらうか？」

「君と思つてやつたんだらうけれど、事實は僕だから、身代りに相違あるまい」

「忌々しい野郎だな、何うも」

「君、門燈が消えてゐるやうだつたぜ。眞暗だつた」

「矢つ張り間違へたんだらう」

「暗の晩は氣をつけて歩けと言やがつたが、僕のことだとは思はなかつたよ」

「ハツハ、ハ、」

と光岡君も笑ひ出した。

「君達はひどい」

「何故？」

「笑つてゐるんだもの」

「失敬々々。お怪我はなかつたですか？」

と僕は慰問に努めた。

「頭が痛だらけです」

「冷したら宜いでせう。災難ですな、本當に」

「帽子を落して來ました」

「僕、行つて拾つて來ませう。門前ですか？」

「はあ。しかし、奴、未だゐるかも知れませんよ」

「のれば結構だ」

と光岡君が立つて行つた。僕は後に従つた。ケンさんのソフト帽が低い太い花崗石の門柱の上にチヤンと載せてあつた。次郎公の勝ち誇つた心持がよく現はれてゐた。

宣傳を忘れないケンさんだ。玄關へ駆け込むと早々通じて置いたと見えて、お母さんと純子さんが光岡君の書齋へ見舞ひに来てゐた。僕達が戻つたら、ケンさんは物語りの最中だつた。まさか武勇傳でもあるまい。

「眞暗だから間違はれるかも知れないと思つたんです。それで逃げ出したんです。咄嗟の場合、頭が働き過ぎました。そのくらゐなら、次郎さん、僕だよ」と聲をかければ宜かつたんですけれど、そこまでの落ちつきはありません」

と心理描寫をして誤魔化してゐた。

「帽子があつたよ」

と光岡君が報告した。

「有難う」

「昔なら兜を取られたんだね」

「うん」

「だらしないぜ」

「暗殺みたいなものさ。不意打ちだから、豪い人でもやられる」

とケンさんは苦しい。災難だけれど、醜態を免れない。しかしお母さんの命によつて、純子さんから直接介抱を受ける光榮に浴した。純子さんは氷を取り寄せて、ケンさんの頭の瘡を冷してやつた。

「お痛いでせう？」

「大したことはありません」

「兄さんのお身代りよ」

「然う思つて諦めます」

「これでもう事済みになつたんですから、功勞者よ、あなたは」

「恐れ入ります」

「兄さんでなくて宜うございましたわ」

「ひどいですね」

「いゝえ、兄さんだと以下次號つてことになりますから」

「成程」

「タオルを替へませう」

「何うぞ」

「君、目の縁が少し黒くなつてゐるぜ」

と光岡君が覗き込んだ。

「然うかい？ 厭だなあ。實は目に力を入れると痛いんだ」

「黒目つて奴だ。一寸妻味がある」

「冗談ぢやないぜ。これに懲りて喧嘩はもうしないことだよ。罪も科もない人間が飛沫を食ふんだから」

「何とも申譯ない」

「災難だから諦めるけれど、多少君の参考にもなるだらう？」

「以來慎む。考へて見ると氣の毒だ。君はこの間自腹を切つて酒代を出した上に身代りになつたんだから、念が入つてゐる」

「それでゐて元來の事件には些つとも關係がないんだから、天意のあるところが分らない」

「全く變な廻り合せだね」

「本當なら、稻垣君あたりがやられても宜いんだぜ。ねえ、稻垣君」

とケンさんはその邊が本音だつたらう。

### 正面衝突

純子さんは僕の當てがはれてゐる天井部屋を富士見室と呼ぶ。富士山が眞正面だ。僕の部屋へ上つて來ると、先づ窓から遠く望む。しかし天氣の都合で見えたり見えなかつたりする。見えないと、

「駄目ね、今日は」

と言つて、直ぐに出て行つてしまふことがある。あなたに御用はありません。富士山を見に來たんですわといふ意味を傳へる積りらしい。見えると、申譯が立つと思ふのか、

「好いわね、今日は」

と窓の側の椅子にかけて眺めながら話す。椅子は僕が注意して豫めそこに置くのである。僕は富士山に然う興味を持つてゐないけれど、晴れ渡つて展望の利く日を書き入れにしてゐる。死火山よりも生きてゐる妙齡の女性に興味を持つのは止むを得ない。人格者をもつて任じてゐても、青春の血潮

温い青年だ。

光岡君は一片の吸取紙で僕の念頭を見て取るくらゐ目が利いてゐるから、この邊の消息を疾うから察してゐたのらしい。僕が純子さんと話してゐるところへ上つて來て、少々露骨に諷したことがあつた。

「兄さん、今日は富士山がよく見えますよ」

と純子さんが先づ窓の外の地平線へ注意を呼んだのである。

「成程」

「こんなこと珍らしいわ」

「うむ」

「夕日を受けて透き通るやうぢやありませんか？」

「恰好も實に好いですね。靈山ですよ、矢つ張り」

と僕も調子を合せた。

「今頃分つたのかい？ そんなことが」

「常識的には知つてゐるけれど、然う實感したのは最近だ。この頃は毎日見てゐるから」

「大きなものを利用する」

「え？」

「規模が大きいよ」

「何の規模が？」

「ハツハ、ハ、」

「富士山かい？」

「うむ。富士山だから大きいつてのさ」

「何のことだか分らない」

「ハツハ、ハ、」

と光岡君は得意の笑ひ聲だつた。

「私、もう失禮致しますわ」

と純子さんが立ちかけた。

「宜いぢやないか？ 未だ」

と光岡君はそれ丈けで打ち切るのは惜しいのだつた。

「でも」

「でも何だい？」

「お邪魔になりますから」

「僕がかい？」

「まあ」

「もつと富士山を觀賞したら宜いだらう。ハツハ、ハ、」

「厭な兄さんね。馬鹿笑ひばかりなすつて」

「ハツハ、ハ、」

「稻垣さん、失禮致します」

と純子さんは逃げ出した。

「變なことを言ふなよ」

「冗談だ」

「程度がある。純子さんがこゝへ来なくなると困る」

「何故？」

「君の監督上さ。今もその相談をしてゐたんだ」

「お邪魔をしたね」

「うむ」

と僕は平氣だつた。

しかしその後見透かされてからは悉皆氣が弱くなつてしまつた。光岡君が一本釘を差した通り、硝子の家に住むものは石を投げ得ない。僕はもう侃々諤々の議論を差控へた。却つて光岡君の意向を覗ふ傾向がある。考へて見ると情ない。それでゐて純子さんの方は一向進捗しないのである。純子さんは相變らず富士山を見に来てくれるけれど、單に富士山を見る爲めに富士山を見るのかも知れない。僕の方から純子さんの部屋へ打ち合せに行く機會は絶えてしまつた。何となれば、侃々諤々を廢業して以來、相談をするにも材料がない。

「稲垣さん、あなた駄目ね」

と或日純子さんが不平らしく言つた。光岡君は先頃美千代さんの肖像畫を描いてから又繪の方が熱心になつた。日光色電燈といふ仕掛けをして、夜もその下でブラツシュを揮ふ。我を忘れてゐるから

自然學業がお留守になる。純子さんがそれを案じて、制動手の出勤を求めたのである。

「御注意は申上げましたよ」

「でも一向効果が見えませせんわ」

「他のこと、違つて、趣味ですから、或程度までは差支へないでせう」

「兄のは極端でございますからね。繪の爲めに學校を休んで一年後れてゐるんでございますからね」

「學校は休ませませんよ」

と僕も職分は辨へてゐる。唯手際好くやりたい。徒らに感情を害したくない。

「あなたは急にお變りになりましたわ。人格者時代の稲垣さんとは違ひます」

「するともう人格者ぢやないんですか？」

「いゝえ、初めの頃の稲垣さんといふ意味ですわ。兄が人格者の稲垣さんと申して紹介して下さいましたから」

「今は肩書がなくなつたんでせう？」

「えい。唯の稲垣さんよ」

「おや〜」

「お親しくなりましたから」

「それなら宜いですけど」

「しかし肩書が取れただけお弱くなりましたわ」

「加減が分つて来たんですよ」

「手心をなさり過ぎやしません？」

「大丈夫です。光岡君だつて自分のことです。子供ちやありませんから、相應考へていらつしやいますよ」

「あれで考へてゐるんでございませうかね？」

「あなたとは性格が違ひます。緩歩悠々の方です。しかし矢つ張り落ちつくところへ落ちつきます。一體あなたも姉さんも御氣象が激し過ぎます」

「それちや私も剽悍決死の組！」

と純子さんが訊いた。聲が少し甲走つたやうだつた。

「それほどでもありませんけれど」

「麹町の姉は剽悍決死でございますつてね？」

「さあ」

「私、妹ですから、矢つ張りその部類でございませう？」

「ハツハ、」

と僕は思ひ當つた。しかし冗談の積りだつた。

「姉さんも可愛さうでございませう、そんな風に誤解されたんぢや」

「剽悍決死は少し厳しいですね」

「少しどころでせうか？」

「大いにです」

「憤つていらつしやいましたよ。稲垣さんつて方は見かけによらないお口の悪い人ですつて」

「僕ちやありませんよ。ケンさんですよ、然う言つたのは」

「あら、あなたが然う仰つたのをケンさんがうっかりお喋りしたんですわ」

「違ひますよ。ケンさんが然う言つたんです。僕は相槌を打つただけですよ」

「相槌なら矢つ張り認めていらつしやるんでせう？ いけませんわ」

と純子さんは何處までも僕に責任を負はせる積りらしかつた。世間知らずだから、無暗に身最良が強い。光岡君のことでも僕が調子に乗つて餘り深く突つ込むと好い顔をしてくれない。況して麹町の姉さんといへば、若い女性の最高權威と思つてゐる。

「迷惑ですな、これは」

「私こそ好い迷惑よ。昨日はサン／＼でした。姉さんばかりでなく、兄さんまで本當に少しお冠のやうでしたわ」

「矢つ張り、その、何ですわね」

「何でございますか？」

「兄さんは姉さんに忠實なんですね。御圓滿で結構です」

「稲垣さん、御冗談ぢやございませんよ。私、あなたのお蔭で姉に叱られたんですから」

「一體何うなすつたんですか？」

「ケンさんも好くありませんけれど、あなたが本元よ。あなたは何でも此方の兄さんの仰有ることをそのまゝ信じていらつしやるんですから」

「さあ」

「ケンさんは麹町のお氣に入りですから、始終出入りして、何でもヘラ／＼お喋りをしてしまひますのよ。あなたはこの間印象を物語るとかいふ題目で氣焰をお揚げになつたんでございますつてね？」

「そんなことはありませんよ」

「いゝえ、一時間ばかりに亘つて、お父さんお母さん初め皆の御批評をなさいました」

「驚きましたね、これは。根も葉もないことです」

「でも麹町の兄は如何にも女婿らしく出来上つてゐると仰有つたことがチャンと響いてゐましたわ」

「それはケンさんの批評です。しかしいつの間にか僕が言つたことになつてゐるなら仕方ありません」

と僕は覺えず毛色ばんだ。形勢が分つて來た。ケンさんが策動を始めたのだつた。

「お憤りになるなら、私、もう申上げませんわ」

「いや、憤りはしません。しかし辯解したところで水掛け論ですから」

「でも相槌をお打ちになつたんでございませう？」

「さあ。相槌つてこともありませんが、反駁するにも及びますまい。單に否定しないで聞き流したまひの話です」

「何方にしても、損をしたのは私ですわ。」純子さん、あなた、本當にお饒舌りね。稲垣さんはあなたが仰有らなければ分らないやうなことを知つていらつしやるんですから」つて、睨みつけられました

「何ういふことですか？」

「今申上げたやうなお話よ。麹町では姉さんがお天下さまですつて」

「事實お天下さまですか？」

「存じませんわ、私、そんなこと」

「しかし姉さん自身がお認めになつてゐるやうな論理ぢやありませんか？」

「さあ」

「あなたが御存じないことをあなたが仰有いますか？」

「私、そんなこと申上げた覚えはありませんわ」

「僕も仰有らないことを承はる筈はないんですから、これは些つと變ですわ」

「ケンさんが嘘をついたんでせうか？」

「先づその邊でせう」

「姉だつて兄さんを立てゝゐますわ。下敷になんか決してしちやゐませんわ」

「その下敷つてこともケンさんが言つたんです。僕は初めて聞いて、成程面白い言葉があるものだと思つたくらゐです」

「それちやケンさんが悪いんですわね、何でも」

「僕は話相手になつた丈けで責任はない積りです」

「宜うございますわ、それなら」

と純子さんは投げ出すやうに言つた。決して宜いのではない證據に、少し柳眉を逆立てゝゐた。僕は

つい本氣になつて突つ込み過ぎたと思つたが、ケンさんに對する反感を抑へることが出来なかつた。

「矢つ張り人を見たら泥棒と思ふ方が安全です」

「何故？」

「紳士の假面を被つてゐる狐狸が恐ろしいですから」

「稲垣さん、それはお言葉が過ぎはしませんか？」

「しかし見すゝ嘘をついて、僕を陥れたんですから」

「そんな深い考へはございませんわ」

「僕、ケンさんと對決しても宜いんです。今度會つたら面責してやります」

「あなたは私を困らせるお積り？」

「そんなことはありませんけれど」

「私が一寸御注意申上げたからつて、そんなに仰有らなくても宜いちやございませんか？」

「御迷惑は決してかけません」

「氣まづいことをして下さると、私、この上今度はお母さんに叱られますわ」

「それちや僕、沈黙を守ります」

「然うして戴きませう。先刻から申上げたこと兄さんにも内證よ」

「はあ」

「兄さんはそれでなくてもケンさんを誤解していらつしやるんですから」

「……………」

「私、もう一つ美千代さんのことを御相談申上げたいと思つてゐたんですけれど、あなた、お憤りに

なつてしまつたから、今日はもう駄目ね」

「いや、憤つてなんかゐませんよ」



「でも、ケンさんが又お話の中に出て参りますから」

「構ひません。伺ひませう」

と僕は氣を落ちつけた。

「私、ケンさんにお頼みして、美千代さんが兄のところへ來ないやうにして戴かうと思つてゐますの」

「は、あ」

「ケンさんなら穩かに手を切る法があるんですつて」

「手を切るつて、別に約束も何もないんでせう？」

「ないと思つてゐたんですけれど、ケンさんのお話によると、兄さんから手紙が澤山行つてゐるんですつて。兄さんのことですから、何とも申されませんわ。いつかも美千代さんはお憤りになつて、新聞に出してやると仰有つたでせう？」

「はあ」

「怖いよ、あの人は。氣むづかしい兄さんが目に餘るやうな我儘をされても、御機嫌を取るんですから、私、矢つ張り何かあるんだと思ひますわ」

「僕、卓爾君に確めて見ませうか？」

「いけませんの。兄さんの知らない間に計らつて遠退かせれば、自然消滅になりますから、それで宜

いんですつて」

「何ういふ風に計らふんでせうか？」

「ケンさんは美千代さんの秘密を握つていらつしやるのよ。文句は言はせませんと仰有いました」

「毒をもつて毒を制するんですね」

「まあー」

と純子さんは目を見張つた。

「ハツハ、」

「何うでございませうか？」

「さあ。僕は矢つ張り眉唾ものだと思ひますね。兄さんが美千代さんに手紙を上げてゐるか何うか疑問です」

「確かに上げてゐますわ。先方から寄越すんですから」

「それが問題になる手紙か何うか疑問です。それを兄さんに確めちやいけないとケンさんは言つてゐるんでせう？」

「はあ」

「可怪しいですよ」

「でも有効に遠退かして戴ければ宜いぢやございせんか？それが眼目ですから」

「遠退かして貰ふのは結構ですけど」

「私、立ち入って内容を伺ふのが怖いよ。ケンさんの口吻から察しますのに」

「うまく脅かしてゐるんですよ」

「まあ！」

「兎に角、美千代さんには僕も手の出しやうがないんですから、ケンさんに計らって戴いたら宜いでせう。あの人なら元來が一つ穴の貉ですから、有効に定つてゐます。しかし御注意までに申上げて置きますが、消毒劑に高貴藥つてもものはありませんよ」

と僕は利かせてやつた。

「何ういふ意味でございますか？」

「効力價值をお買ひ被りになつてはいけません」

「あなたはケンさんに悉皆反感を持つておしまひになりましたのね」

「嘘をつくやうな人間はもう紳士として扱ひません」

「稲垣さん、私、餘計なことを申上げ序に、もう少し御理解を願つても宜しうございますか？」

「承はりませう」

「あなた、近い中に麹町へ一週上つて下さいませんか？」

「さあ」

「姉さんはお遊びにいらつしやいつて度々仰有つてゐますわ」

「しかしこの際は御免蒙りませう。ケンさんが讒訴をした後へ見す見す油を絞られに出頭するやうなものぢやありませんか？」

「いえ、お天下さまつてことは自分でも認めてゐるんですから」

「僕、本當にそんなことを言つた覚えはないんですよ」

「それよりも姉はあなたが一遍もお顔出しをなさらないから、御機嫌が悪いんですわ。此方の兄さんと又これでせう？」

と純子さんは掌と掌をスレ／＼に動かして見せて、

「それですから、あなたが些つともお伺ひにならなければ、變に思ひますわ」

「今更仕方ありません」

「いえ、姉はお天下さまですから、此方の出やう一つよ。来る人は好き、来ない人は嫌ひつて、チヤンと定めていらつしやるんですから」

「すると僕は姉さんの御機嫌を取りに上るんですか？」

「はあ」

「……………」

「然うして下さらないと、私、困りますわ」

「……………」

「お厭？」

「あなたがお困りなら、厭つてことはありませんけれど」

「それぢや何うぞ」

「伺ひませう」

と僕は引受ける外仕方がなかつた。

「有難うございました」

「矢つ張り一度伺つて置くのが禮儀でせう」

「禮儀よりも必要よ。お分りになつて？」

「はあ」

「それからもう一つございますわ」

「何ですか？」

「ケンさんと仲を好くして下さい」

「……………」

「いけません？」

「はあ。僕は自ら欺くことの出来ない性分です」

「でも必要よ」

「自ら欺くことですか？」

「はあ。或程度まで」

「何故ですか？」

「ケンさんは麴町のお氣に入りますから」

「あなたのお氣に入りぢやないんですか？」

「まあ！ 厭な稻垣さん」

「ハツハ、ハ、」

「麴町の御機嫌を取つて下さるからには、ケンさんと喧嘩なんかなすつちや駄目よ」

「承知しました」

「私、ケンさんが嘘をついた次第が分りましたわ。ケンさんはあなたが羨ましいのよ。父からも母からも兄さんのことを頼まれてゐるんですけれど、この頃は悉皆あなたにお株を取られてしまったと思つていらつしやるんですから」

「成程」

「しかし決して深い考へのある人ぢやございませんわ。頼まれもしないのに身代りになつて暗討に會つたりするくらゐですから、却つて單純よ。本氣になつてお憤りになる必要はございませんわ」

と純子さんは要するにケンさんを重要視してゐなかつた。

これで僕は大概の形勢が分つた。純子さんは矢張り僕に好意を持つてゐる。單に富士山を見る爲めに僕の部屋へ來るのでない。ついでには僕が麹町から睨まれることを好まないのである。麹町を善隣として置かなければ、いざといふ場合に困る。私、困りますと純子さんはそれを明白に言つてゐる。

「光岡君、僕は近い中に麹町へ顔出しをして來るよ。來い〜と度々言はれてゐるんだから、何んなものだらう？」

と僕は極軽く持ち出した。拔駆けは面白くない。彼方を立てゝも此方が立たなくなる處がある。

「何か用があるのかい？」

「これつてこともないが、一遍敬意を表して置くのさ。こゝでお世話になつてゐれば、禮儀としての必要がある」

「行つて來給へ、麹町は姉よりも兄貴だよ」

「何が？」

「姉は親身だから、喧嘩をしても、理解がある。しかし兄は他人だ。僕が一寸何か言ふと、直ぐに氣を廻して僻む。君一つ僕の虚心坦懐なところを力説して來てくれ給へ」

「宜いとも。その意味でも必要がある」

「僕はもう懲りた。この間行つたんだけれど、左治右衛門さんの仲直りになつてしまつた」

と光岡君は郷里の諺を持ち出した。好い鹽梅に僕の意のあるところに氣がつかない。

「純子さんがそれを心配してゐるんだよ」

「面倒だから又あやまつても宜いんだけれど、僕が行くと又左治右衛門さんだ。神經衰弱は困るよ」

「君が行かなくとも、僕が時々顔出しをすれば、自然、君の話も出るし、僕が辯解するから、意思が疏通するだらう」

「巧くやつてくれ給へ」

「うむ」

「ハツハ、」

「何が可笑しいんだい？」

「序に君の方もさ」

「え？」

「巧くやるのさ。好いところへ氣がついたよ。僕は黙つて見てゐるけれど、差當りのところケンさんの方が歩が好いやうだぜ」

「そんなことはないよ」

と僕はつい否定してしまつた。駈引と來ると甚だ拙い。これではその爲めに麹町へ行くことを告白したやうなものだつた。



「いや、取り入ることにかけちや名人だからね。決して油断はならないよ」

「暗中飛躍ちや敵はないけれど」

「正々堂々の陣なら成算があると言ふのかい？」

「さあ」

「逆も一筋縄で行く奴ぢやないぜ。今に分る」

「危いのかい？ 僕の方が？」

「両手をついて僕の軍門に降り給へ。何とかしてやる」

「妥協をしようたつて駄目だよ。職分は職分だ。この爲めに君に頭が上らなくなつてしまつたんぢや存在の理由がなくなる」

「それぢや何處までも自力でやるのかい？」

「うむ」

「それも宜からう。しかし一言注意して置くが、間の晩を氣をつけ給へよ」

「腕前は分つてゐる。次郎公に同突かれたんだから」

「いや、自分で手を下すやうな馬鹿ぢやない。麴町は門を出ると隣りの伯爵家の屏が長いから用心し給へよ」

「脅かしちやいけない」

「ハツハ、」

「本當にそんな形勢が見えるのかい？」

「何とも分らないよ。有らゆる手段を講じてゐるんだから」

「多少思ひ當ることがないでもないんだけど」

「何うせ君の方がしてやられるんだ。しかし目に餘るやうなら僕が出動する。ガンとやつてやる」と光岡君は頼もしい。

僕は早速麴町を訪れた。光岡君の姉さんには度々お目にかゝつてゐるけれど、義兄の弘さんには初対面以来の御無沙汰だつた。純子さんが電話で打ち合せてくれたにも拘らず、應接間で可なり待たされた。夜陰馳せ参じて心にもない御機嫌を伺ふ。半年前だつたら固辭したのだから、昨今は仕方がない。人格者の稲垣君は純子さんの言つた通り、肩書を何處かへ落してしまつたのである。

「まあ、稲垣さん、ようこそ」

と姉さんが現れた。僕が挨拶を述べ終つたところへ御主人の弘さんが入つて来た。その後にはケンさんがニヤ／＼笑ひながら立つてゐるには驚いた。ケンさんは主人に續いて、

「會社の歸りを引つ張られました」

と言つた。僕は機會があつたら身の明りを立てる積りだつたが、相手が目の前に控へてゐては仕方がなかつた。

「何うですか？ 卓爾はこの頃は」  
と姉さんが間もなく訊いた。

「御勉強です」

「お蔭さまで何うやら落ちついてゐるやうですけど、御大抵ぢやございませんか？」

「いや、一向お役に立ちません」

「變りものでございますからね」

「そんなこともありませう。若し變つてゐるとすれば、好い方へ變つていらつしやるんです」

「それは好いところもありますよ、卓爾さんは」

と義兄は如才ない。

「はあ」

「未だ出来上つてゐないんです。あれで世間が分つて少し悟るところがあれば、大したものになりま  
す」

「僕も然う思ふんです。僕は始終一緒ですから遠慮をしません。君は天才の出来損ひだと言つてやる  
んです」

「成程。面白い御観察ですな」

「頭は好いですよ。やれば何でも出来るんです」

「ところがナカ／＼やらないんでせう？ 直接爲めになることは」

「はあ、それで困るんです」

「しかしあなたも豪いですな。卓爾さんに意見をして喧嘩にならないのはあなただけですよ」

「實際稲垣君丈けです。矢つ張り人格の然らしめるところでせう」

とケンさんが調子を合せた。何をこの野郎と僕は思つた。

「人格者でございますわ、稲垣さんは」

と姉さんも僕を推稱した。三人申合せてゐるやうだつたから、僕としては氣味が悪かつた。

「何う致しまして」

「いゝえ、私達とは遠ひます」

「飛んでもないことです」

と僕は風雲急の感に襲はれた。

「卓爾ばかりぢやありませんわ。稲垣さんの御監督を受けなければならぬのは」

「こゝに一人ゐるかね」

と義兄が自分の鼻を指さした。

「稲垣君、こゝにもゐる」

とケンさんが自首した。

「稲垣さん」

「はあ」

「この二人は逆も不良よ」

「まさか」

「いゝえ。主人に言はせますと、ケンさんが誘ふんですつて。ケンさんに訊くと、主人が引つ張るんですつて」

と姉さんは眞剣だつた。

「ハツハ、ハ、」

「本當よ。お互に塗り合つてゐますの」

「御交際ですから、カフェーぐらゐは仕方がないでせう」

と僕は自分のことではなくて安心した。

「まあ、開けていらつしやるのね」

「ハツハ、ハ、」

「カフェーぢやございませんわ、待合よ。それも長いことカフェーと思ひ込ませて、私を瞞してゐたんですから」

「は、あ」

「私、或日ケンさんを捉へて、到頭泥を吐かせましたの」

「おい、それぐらゐのところでは堪忍しておくれ」

と義兄が惻然した。

「いけませんよ、懲らしめの爲め、お客さまといふお客さまに吹聴して上げますわ、稲垣さん」

「はあ」

「私、何うしたとお思ひになつて？」

「さあ。ケンさんがお先にお泥をお吐きになつたんですか？」

と僕は訊き直してやつた。

「はあ。腰巾着が口を開きましたから、主人も否應なしでございます。私、檢證の爲めに二人をその待合へつれて参りましたの。この上瞞されちや溜りませんからね。二人を坐らせて置いて、女中さん二人に藝者の役をお頼みしました。あゝやつて斯うしたとか斯うやつてあゝしたとかと一々實地をそのまゝに演出して戴きましたの」

「成程」

「懲らしめの爲めよ。利きましたわ。好い耻さらしでございますからね。以來二人とも慎んでゐます」

と姉さんは得意だつた。成程、お天下さまだと僕は思つたのである。

「サン／＼でしたよ。會社の仕事の相談に行つたんですけれど」と義兄は頭を掻いてゐた。

「御相談なら家でも出来るぢやございんませか？」

「いや、目先が變ると氣も變つて、好い智慧が出るからさ」

「目先つて何？」

「何つてこともない。環境さ」

「環境がお氣に召しません？」

「然ういふ次第ぢやないけれど」

「何ういふ次第？」

「それは人間だもの。然う理詰めには行かない」

「オホ、、、」

「もう恐れ入つてゐるぢやないか？」

「堪忍して上げますわ。好いお智慧が出て、會社のお仕事の能率が上つてゐるんでございませうから。私、兎に角、御成績をお父さんに伺つて見ますわ」

「參つたな、これは」

「人格者の前で油を絞つて上げるのよ。待合入りをするやうな人が意見をして、卓頭が承知するも

のですか？」

「それだからもう諦めてゐる」

「ケンさんも落第よ」

「はあ。取つ捉まつたんですから、もう仕方ありません」

とケンさん、元氣がない。最近の事實らしかった。僕としては好い参考になる。

「卓頭は氣むづかしい丈けに、よく人を見てゐますよ」

「はあ」

「ケンさんはこゝへ来て不平を仰有るけれど、信用のないのが當り前ですわ」

「これも人格の然らしむるところでせう」

「少し稲垣さんに御指導して戴く必要がありますわ」

「稲垣君、何分宜しく」

「冗談仰有つちやいけません。ハツハ、ハ」

と僕は少し高く笑ひ過ぎた。次の瞬間にケンさんは凝つと僕の顔を睨んでゐた。

話題が又少時卓爾君の上へ移つた後、

「稲垣さんは何ういふことが御趣味でいらつしますの？」

と姉さんが訊いた。僕が正客だから、何うしても僕が中心になる。



「これつてことはありません」

「映畫でございませう？」

「さあ。好きつて程のこともないんです」

「麻雀は？ あら、丁度四人揃ひましたから如何？」

「僕、やつたことがないんです」

「遠つたものね、矢つ張り」

「藝なし猿です」

「卓爾と同じやうに柔道をおやりでございませう？」

「はあ。柔道ぐらゐのものです」

と僕は可なりやるやうに言つた。大學に入つてからはやめてゐるのだけれど、暗討を食はすかも知れない男へ丁度好い幸ひに示威の積りだつた。

「私はゴルフです」

と義兄が名乗りを上げた。ゴルフは誰しも直ぐ天狗になるものと見えて、自慢話が出た。

「稻垣君、講釋丈け伺つてゐると名人のやうでせう？」

とケンさんが口を出した。

「お上手なんでせう、無論」

「未だ百以上ですから、カウントに入りません」

「おい。素つばぬくなよ」

と弘さんは迎も好人物らしい。

「百以下で廻れるやうになつたら、擔棒童に十圓やるお約束がしてあるんです」

「それがもう近いんだ」

「何うして、前途遠遠でせう。擔棒童が言つてみました」

「何て？」

「それまでには僕の頭に白髪が生えるでせうつて」

「ハツハ、」

「ゴルフ丈けは、私、分りませんけれど、そんなに下手なんですか？ 尤も無器用ですから、何をやつても上達の見込はございませんけれど」

と姉さんは簡單に止めを刺した。義兄は外に謡曲をやつてゐるけれど、これも調子が外れるらしい。尙ほ郵便切手の蒐集を主張した。但しこれには上手も下手もない。

「ところで僕は遠いですから、お先に失禮させて戴きます」

とケンさんが時計を見た。九時だつたから、もう頃合だつた。

「僕も御一緒に」

「稲垣さん未だ宜しうございませう？ 何うぞ御ゆつくり」

「いや、これからは度々お邪魔させて戴きますから」と僕も連れ立って辭去した。

門を出た時、成程、隣屋敷の塀が長いと思つた。しかし大丈夫だ。相手が一緒だから、暗討つてことはあり得ない。そんな聯想を咬るやうな暗い晩だつた。暗がりに自動車が一臺止まつてゐる外、近くに人通りがなかつた。

「稲垣君、君はこれから直ぐお歸りですか？」

とケンさんが寄り添つた。

「はあ。今晚は偶然御一緒になつて失敬しました」

「いや、僕こそ。お目にかゝりたいと思つてゐたところですから、丁度好い機會です。その邊のカフェーへ附き合つて下さいませんか？」

「さあ。もう晩いでせう」

「未だ宵の口ですよ。僕はその積りで早目に切り上げたんです」

「何か御用ですか？」

「はあ、折入つてお願ひがあります」

「承はりませう。こゝで宜いぢやありませんか？」

と僕はこの男ともう言葉も交したくないのだから、カフェーへ連れ込まれることなどは以ての外だつた。

「厚かましいお願ひですから、暗いところで申上げる方が宜いかも知れません」

とケンさんは立ち止まつた。

「何ですか？ 一體」

「この間から申上げてゐる純子さんの問題です。稲垣君、僕、もう赤裸々で行きます。地面に手をついてお願ひしますから、助けて下さい」

「何ですか、仰有つて戴きませう」

「純子さんを僕に譲つて下さい」

「は、あ」

「僕、實は御両親にもこの御夫婦にもそれとなく御理解を願つてあるんです。權利を主張するんぢやありませんけれど、君よりも先口です」

「譲るの何のつて、僕は一向關係のない問題です」

「それぢや宜いんですか？」

「何がですか？」

「僕が純子さんを貰つても？」

「それは御自由でせう」

「然う突つ放されたんちやお願ひも何もありません、僕は君のお力に継りたいんです。耻も外聞もな  
く、頭を下げてゐるぢやありませんか？」

「厭ですよ、僕は。僕には何うも出来ないことです」

「そこを考へて戴けませんか？」

「考へる餘地も何もないぢやありませんか？」

「それぢや又改めて申上げませう。往來端ぢやゆつくりお話が出来ません」

「失敬します」

と僕はスタ／＼歩き出した。

「稻垣君」

「何ですか？」

「僕、明日の晩伺ひます」

「同じことですよ」

「それぢや力になつて戴けませんか？」

「僕は仲人なんかする立場ぢやありません」

「貰ふ立場ですか？」

「……………」

「何うですか？」

「將來のことは分りません」

「君、ハッキリ言ひ給へ」

とケンさんは僕の腕を捉へてグイツと引つ張つた。

「何をやる？」

と僕は振り拂つた。

「ハッキリ言ひ給へ」

「分らないと言つてゐるんだ」

「貰ひたいといふ意思はあるんだらう？」

「そんなことは發表する限りでない」

「人格者が聞いて呆れる」

「何でも宜い」

「人格を笠に着て純子さんを手なづける積りか？」

「そんな暴言を吐く奴にもう用はない」

「待て」

とケンさんは又僕の腕を捉へた。

「何をやる？」

「結着をつけて行け」

「つけてやらうか？」

と僕は場合によつては一つ食はせてやる積りだつた。

「横領するなら人格者の面を脱げ」

とケンさんは低い聲で罵つて、手を放した。しかし僕を恐れたのではなかつたらしい。人が通りか  
かつたのだつた。

「純子さんを貰ふ貰はないは君の自由僕の自由だ」

「……………」

「僕はそれ以上何も言ふことはなす」

「君は信用の地位を利用して私するのさ？」

「何とでも勝手に解釋し給へ」

「そんな人格者が何處にある？」

「煩さい！」

「貰ふなら貰つて見ろ」

「貰ふとは言つてゐなす」

「偽善者！」

「何でも構はなす」

と言ひ放つて、僕はグン／＼歩き出した。そこへ自動車ブ／＼鳴らしながら追ひついた。先に  
扉の側で見かけたのだつた。助手が窓から片手を出して勧めたから、僕は直ぐに止めて乗り込んだ。  
暗い車だと思つたら、走り出すと直ぐに明るくなつて、

「やう」

と振つた助手は光岡君だつた。光岡家の自動車だつた。

「何だい？ 君か？」

と僕は驚いた。

「迎ひに来たんだよ」

「これは有難い」

「早くやつてしまへば宜いと思つてウズウズしてゐたけれど諦めた。臆病犬同志だから、吠えるばかりで些つとも咬み合はない」

「見てゐたのかい？」

「うむ。何うしたんだい？ 一體」

「家へ歸つてから話す」

「急がう。森川君、一寸僕に貸し給へ」

と光岡君は運轉手に代らうとした。

「いけません。人を轢くと大變です」

と森川さんは儼然として卻けた。通行人も危いけれど、お客さんも危い。

### 一通十圓の手紙

僕は光岡君を大賢の出来損ひだと思つてゐる。本人も唯の馬鹿ではないと主張してゐる。子供の時井戸に落ちて頭を打つて以來發育の均等を缺いたといふのは何うも事實らしい。全然間の抜けてゐるところがあると同時に、人一倍素敏いところがある。僕を麹町へ迎ひに来てくれた晩は好い方面だけが躍動して、明察恐れ入るものがあつた。ケンさんの言ひ分を悉皆知つてゐた。僕は話してゐる間に幾度も先を越された。

「君は聞いてゐたんだらう？」

「聞えないよ。自動車の中と往來だ。見つかるらと困るから、接近しなかつたもの」

「それぢや何うして分る？」

「鈍いぜ。それよりも先に態々迎ひに行つたのが疑問になりさうなものぢやないか？」

「それも訊かうと思つてゐたんだ。心配があつたのかい？」

「うむ」

「負けやしないよ。腕前は分つてゐる」

「ケンさんは自分ぢや手を出さない。これは警戒して置いた筈だ」

「しかし誰もゐなかつたもの」

「君はケンさんを見括つてゐるから危い。今にやられるよ」

「大丈夫だ」

「ケンさんの言ひなりになつて、ついて行つて見給へ。柔道三段の用心棒が待つてゐるんだ」

「ふうむ」

「先方へ行つて談判になれば否應なしだ。僕は君がついて行くやうなら、飛び出す積りでゐたんだ」

「しかしケンさんは僕の訪問を知つてゐる筈がない。偶然落ち合つたんだから」

「昨日の晩、純子が電話で都合を訊いてゐる。その時、ケンさんが行つてゐなかつたとは斷言出来まい？ 僕は無駄になれば結構だと思つて念を入れたんだが、矢つ張り杞憂ぢやなかつた」

「宜かつたよ。本當に有り難う」

「未だお禮を言ふには早う」

「何故？」

「これからだ。君は早晩やられる」

「脅かしちやいけない」

「本當だ。僕はケンさんの方が歩が好いと思つてゐたけれど、足掻き出したところを見ると、もう風を食つたんだ。破れつかぶれになるとすれば、僕にはかゝれないから、君に恨を晴らす」

「風を食つたといふのは、君が何か干渉したのか？」

「いや、僕は高見の見物だけれど、奴が勝手に食つたのさ」

「迷惑千萬だな。僕は何うすれば宜いんだらう？」

「何うしても駄目だ」

「やう」

「仕方がない。僕だつて始終君についてゐる次第には行かないからね」

「見殺しか？」

と僕はケンさんの權幕を思ひ出して心細くなつた。あれは確かに次郎公に衝突された臆病者の態度でなかつた。柔道三段がついてゐるのだ。

「こゝに一つ方法がある。窮策だけれど」

「何うするんだい？」

「僕がケンさんをやつつける」

「そんなことをすれば刺戟になるから、僕が益々危い」

「何方にしても危いんだから、機先を制す。撲られつ放しちや損だらう？」

「僕は撲られたくないんだ。撲りたくもないんだ」

「そんな分らないことを言つても仕方がない」

と光岡君は人のことだと思つて、簡単な差引勘定を考へてゐる。

「これは君とケンさん丈けでなくて、四人の問題だから、複雑してゐる。結局は僕と用心棒の勝負だらう」

「用心棒は君の知つてゐる人間かい？」

「ケンさんの親類だ。美千代さんの愛人だから、僕の競争相手だ」

「えゝ？」

「僕が横から手を出して、一寸失敬してやつたんだ」

「君に訊きたいと思つてゐたんだが、その失敬の程度は何んなところだい？」  
と僕は忽ち善導係の立場に戻つた。

「さあ」

「ハツキリ答へて貰はう」

「善導係の責任問題が起りさうなところまで行つてゐる」

「困るぜ。僕は腹を切らなければならぬ」

「僕はケンさんの術中に陥つてしまつたんだ。今考へて見ると、ケンさんは純子に野心を懐いて、豫め僕を籠絡する爲めに美千代さんを薦めたんだ。斷つて置くが、僕だつて綺麗な人は嫌ひぢやない」

「それは斷らなくても分つてゐるよ」

「いや、全然目がないんだ。顔が綺麗だと他の要素は些つとも計算に入れない。美即ち善と思ひ込んでしまふ。ケンさんはそこへ見越しをつけたんだね。危いところだつた」

「氣がついたのは感心だね」

「好い氣になつて交際してゐたら、この間仁科某つて男が手紙を寄越した。美千代さんの件で面會したいといふんだ。家へ来て貰つたが、君は知るまい？」

「うむ。知らなかつた」

「そんなことで何うするんだい？ 僕は捕られたよ。性の悪い男さ」

「金を出したのかい？」

「出すものか？ そんな因縁はない。勝手にしろと言つて追つ拂つてやつた」

「美千代さんは何うなるんだい？」

「来るものは拒まず、去るものは追はずだ」

「駄目だね、矢つ張り」

「しかし来ないよ」

「いつ頃のことだい？」

「十日ばかり前さ。此方も意地だ。仁科が下から出れば兎に角、手紙を發表して問題にするなんて言やがつたから」

「それで思ひ當つた。ケンさんつて人は實に策士だ。美千代さんは兄さんの爲めにならないから、もう来ないやうに計らつてやると言つて、純子さんに取り入らうとしてゐる」

「成程轉んでも只是起きない。實は仁科の來た翌日、知らん顔をして様子を見にやつて來たよ。僕が調停を頼むと思つたんだらう？」

「突つ放したのかい？」

「此方はてんで問題に觸れないんだ。あんな奴に恩を着ちや大變だよ。純子を取られてしまふ。僕は皮肉を言つてやつたよ、「君は僕のところへ來たのか？ 銀杏の樹の穴へ歸つて來たのか？」つて」

「ハツハ、」

「あれが悪かつた。あれで風を食つたんだ」

「その男がケンさんの用心棒つてことは何うして分る？」

「實は僕はケンさんの胸倉を取つたことがあるんだ。二三年前だ。兄貴ぶつて忠告したから、つい組みついたんだ。ケンさんは直ぐにあやまつたが、その後から僕には柔道三段の用心棒がついてゐるん

だと言つた。それきり忘れてゐたけれど、仁科が僕を脅かしてゐる時、成程此奴だと思ひ出したんだ。新聞を利用する法もあるし、直接行動つてこともあると言つた。腕節が自慢丈けに、ガツチリした男だよ」

「君は勝算があるのか？」

「あるとも」

「職業は何だい？ 新聞記者か？」

「そんな氣の利いたものぢやないらしい。ケンさんに操られてゐるんだから、頭はないんだらう」

「成程、これは複雑してゐるね」

「同時に切迫してゐるんだよ」

「馬鹿を見るのは僕だ」

「何故？」

「僕はその男に撲られる危険があるんだらう？」

「危険どころぢやない。明日の朝又太陽が出るのと同じぐらゐの可能性だ。その代り僕がケンさんを

撲つてやる」

「弱い奴は損だな」

「何あに、強い奴同志も撲り合ひだ」

「待ち給へ。これは君の意見にばかり従つてゐる場合ぢやない」

と僕は又制動手の役割を思ひ出して、穩便な解決法を考へたが、ケンさんと妥協の見込は何うしても立たなかつた。

「その代り一週こつきりで済む」

「詰まらないよ、これは。僕は善良な學生として、今まで人に撲られたこともなければ、撲られる心配をしたこともないのに、渦中に捲き込まれるんだ」

「僕よりも君だよ、渦の中心は。君が狙はれてゐるんだから」

「僕は休暇になり次第、郷里へ歸る」

「意氣地がないんだね。それぢや棄權するのかい？」

「棄權はしたくない」

「痛し痒しだね」

「痛いばかりだよ。撲られる科はないんだ。君はそれほど事情が分つてゐるなら、何とかしてくれるのが本當だらう？」

「無論出来る丈けのことはするけれど、相手がそれ専門にかゝつて來れば防ぎ切れない。その時は人違ひで次郎公にやられたと思つて諦め給へ」

と光岡君は何の道儀が撲られるやうに豫定してゐる。



僕は悉皆快えてしまった。柔道をやるやうに言つてケンさんを脅かした積りだつたが、先方は有段者を使つて徹底的に來てゐる。逆も勝味がない。種々と考へて、その晩は寝つきが悪かつた。輾轉反側、蒸し暑かつた所爲もあつたらうが、馬鹿な話だ。それから二三日といふもの、何か氣にかゝるこゝとがあると思ふと、暗討ちを食ふ可能性だつた。朝太陽が昇ると同じやうに確實だといふのが利いてゐる。純子さんに打ち明ける機會があつたけれど、それは策の得たものでないと考へた。男らしい光岡君ばかり見てゐる純子さんに、そんな意氣地のない話を持ち出せば、印象を悪くする處がある。これは成り行きに委せて、若し撲られたら、恩に着て貰ふ方が有効だ。純子さんの争奪戦で撲られるのだから、當然同情を惹く。矢張り全然無益でもない。人格者も狼狽すると、見下げ果てた料簡を起す。しかし事情止むを得ない。

風を食つたケンさんはもう光岡家へ寄りつくまいと思つてゐたら、日曜の朝、平氣でやつて來た。僕は光岡君の部屋で顔合せると直ぐに、二階へ引き揚げた。癪に障つてゐると同時に、かゝり合ひになるのを恐れたのである。光岡君が撲れば、止めないではゐられない。しかしケンさんは何處までも圖々しい。間もなく僕の部屋を訪れて、

「稲垣君、この間は失禮」

と擧手の禮をした。ニコ／＼してゐる。

「さや」

「僕、酔つてゐましたから、使命の果し方が拙くて、君の感情を害したかも知れません。勘辨して下さい」

「……………」

「無理な注文ですよ。酔つた風をして、事實酔つてもゐましたが、冗談に託けると言ふんですから」

「冗談ですか？ あれは」

「無論ですよ。麹町の姉さんに頼まれて、君の氣を引いて見たに過ぎません」

「は、あ」

「忠實に復命しましたよ。流石に人格者の稲垣さんですと言つて、姉さんも疑ひを晴らしました」

「何ういふ疑ひがあつたんですか？」

「その折、お尋ねした通りです。讓れと言つたのも姉さんの差金です。讓らないと來れば、君は落第ですけれど、元來虚心坦懐ですから、美事及第でした。随分失敬なことを言ふ奴だと思ひになつたでせう？」

「しかし君は如何にも眞劍のやうでしたね？」

「眞に迫らないと、君も本音を吐かないでせう。仕方がなかつたんです。しかしこんな打ち明け話は麹町へは内證ですよ。僕は困るんです。いつも此方と彼方の間に挟まつて、變な役ばかり引受けさせられるんですから」

「お察し申します」

と言つて、僕は壁間の額を見上げた。狸銀杏が描いてある。

「光岡君にお話しなさいましたか？」

「何をですか？」

「この間の晩のことです」

「いや、一向」

「又誤解するといけませんから、仰有らない方が宜いでせう。何うも麹町との間が面白くありません。しかし説明さへつけて下されば、仰有つても結構ですよ。光岡君だつて常識のない人ぢやありませんから、今日は多少僕の心持が分つたらしいです」

「は、あ」

「失敬します。これから純子さんとお母さんです」

「お忙しいことですか」

「今日は彼方此方へ堂々廻りです。僕さへあやまつてゐれば間違ありません。自分に責任はないのに、何て馬鹿々々しい立場でせう」

「何か事件が起つたんですか？」

「君は知らないんですか？」

「はあ」

「善導係、何をしてゐると訊きたくなりますよ」

「何ですか？ 一體」

「ハツハ、」

「……………」

「美千代さんの問題です。しかし僕が解決を見つけました」

「は、あ」

「失敬します」

とケンさんは急いでゐるやうだつた。

僕は直ぐに光岡君の部屋へ行つて見た。光岡君は腕を組んで考へ込んでゐた。

「何うしたんだい？」

「さて、分らない」

「撲らなかつたやうだね？」

「そんなところぢやない。先刻から首を捻つてゐるんだが、何うしても分らない」

「事件が起つたのかい？」

「いや、ケンさんが綺麗に解決して来てくれたんだ。これを見給へ」

と光岡君は机の上の一束ねに僕の注意を呼んだ。手紙だった。

「何だい？　これは」

「僕が美千代さんに出した手紙だ」

「ふうむ。随分あるんだね」

「冷かすなよ」

「ハツハ、ハ」

「ケンさんが奪還して来てくれたんだ。因縁をつける人間が現れたからには、こんなものを渡して置くとは後々の爲めにならないと言ふんだ」

「成程」

「仁科の方も説きつけたのらしい。道理でその後何とも言つて来ないと思つてゐた」

「ケンさんが責任を負つたのかい？」

「うむ。それだから合點が行かないんだ」

「これは眉唾ものだけ」

と僕も俄かに首肯することが出来なかつた。

「自分が推薦した女性に虫がついてゐて、それが苦情を持ち込んだと聞いては黙つてゐられないから、責任を負つて解決したと言んだ」

「金でも出したのか知ら？」

「内容は訊いてくれると言ふ。いつものケンさんにしては大出来だよ」

「果してその通りなら見上げたものだけれど、餘り出来過ぎてゐる」

「僕もそんな感じがするんだ。しかしこの通り手紙が返つて来てゐるところを見ると、疑つてばかりもゐられない」

「君の受取つた手紙も返すんだらう？」

「僕の方は繪ハガキばかりだ。紀念に貰つて置く」

「それちやもうこれで關係なしか？」

「うむ。仕方がない。しかし僕は勝つてゐるんだ」

「何故？」

「危いと思つて取つたから、仁科が苦情を申入れたんだらう？　僕は女性の心を征服すれば満足する」

「成程」

「それからこの手紙は赤いリボンで結いてある。これが又意味深長だ」

「チョコレート箱だつて赤リボンだらう？」

「あれとは違ふ」

と光岡君は已惚れてゐる。しかしそれで満足して堅實な考へに戻つてくれれば何よりだから、僕は

敢て反駁を加へなかつた。

「實はケンさんは僕にも辯解したよ」

「何を？」

「この間の晩のことさ。冗談だと言ふんだ。麴町から頼まれて、僕の氣を引いて見たに過ぎないと言ふんだ」

「それは嘘だ」

「見え透いた嘘をつくんだから、君も乗つちや駄目だよ」

「僕は瞞されぬ。先方だつて手強いことを知つてゐるんだ。しかし君の方は嘗めてかゝつてゐる。

それに競争だから、この上とも何んな策を使ふかも知れない」

「僕は何ういふ態度を取れば宜いんだらう？」

「待ち給へ。君の方は未だ考へて置かなかつた」

「僕は仁科つて人間が簡単に納まつたのを變に思ふんだ」

「それは仁科もケンさんの親類だ。ケンさんは家の會社へ出てゐるんだから、仁科に家へ乗り込まれたりすると出世に關係する。その邊を話して惻願したんださうだ。それだけは言つてゐたよ」

「成程。その邊は確かにあるだらう」

「しかし君の方は別だから、油断はならないよ」

「僕も然う思つてゐる」

「奴さん、僕の信用を挽回して置いて、又一芝居打つ氣かも知れない。只で親切を盡す人間ぢやないんだから」

「暗討ちの方は何うだらう？」

「仁科はもう動くまい」

「何故？」

「愛人を利用された上に拜み倒されてゐる。餘り好い役ぢやないから、然うくケンさんの言ふことを聽くか知ら？」

「しかし仕事が簡單だからね。小遣取りに引受けないとも限るまい？」

と僕は簡単にやられたくはないが、仁科といふ男の立場になつて考へて見た。察するところ失業でもしてゐるのらしい。

「ケンさんが君に辯解したのも、その邊の消息を傳へてゐるんぢやなからうか？」

「何の邊の消息だい？」

「仁科がもう言ふことを聽きさうもないといふ含蓄さ。ケンさんは後押しがないと、腰の弱い男だからね」

「少し穿ち過ぎてゐやしないかな？」

「喧嘩の駆引は僕の方が専門家だ。場敷を踏んでゐるから、一寸した態度で大抵分る」  
「兎に角、態度一變だつた」

「却つて君を恐れてゐるのかも知れない。ケンさんと君なら、君の方が強い」  
と光岡君の意見は要するに心配無用といふところに歸着してゐた。

しかしケンさんの縁りが間もなく分つた。光岡君は矢張り出来損ひだ。悉皆購着されてゐる。

「稲垣さん、餅は餅屋ね。ケンさんは美千代さんの問題を滞りなく解決して下さいましたわ」  
と或日純子さんが僕の部屋へ富士山を見に来た序に話しかけたのである。

「兄さんからも承はつて一安心しました」

「あなた、呑気ね。あの善導係は人格者過ぎて斯ういふ時の役に立ちませんつて、お母さんが申して  
わましたわ」

「何か経緯があつたんですか？」

「大變よ、凄いな人が来たんですつて。そんな人については、私、多くを語りたくないんですけれど」

「仁科でせう？」

「あら、御存じ？」

「役目は忘れませんけれど、口を封じられてゐれば、仕方ありません」

「それでお母さんが慌て出しましたの。何うしませうつて。私、矢張りケンさんにお頼みして置い

て宜うございましたわ」

「お母さんもあなたも仁科の来たことは御存じない筈です」

「ケンさんから伺ひました。先方はケンさんの親類中の破落戸よ、新聞に書き立てると言ふんです。

兄さんの前途を葬つてやると言ふんです」

「それもケンさんの取次ですか？」

「はあ。そんな人に私達が直接會へるものですか？ ケンさんが間に入つて下さいました」

「はあ」

「示談金を取られましたわ」

「矢張り然うでしたか？」

「兄さんには内證よ、兄さんに知れようものなら、何んなに憤られるか分りませんからつて、ケンさんがクレグレも仰有いました」

「しかし兄さんの問題を兄さんに知らせずに解決なさるのは何ういふ次第ですか？ 何ういふことになつてゐるのか、御本人にお訊きになる必要はないんですか？」

「事が面倒になりますからつて。兄さんに申上げれば喧嘩になるばかりですわ。元來兄さんが追ひ歸したものですから、先方が憤慨したんですつて」

「然う一々ケンさんの取次ばかり信じて宜いんでせうかね？」

と僕は不服だつた。ケンさんは彼方此方を秘密々々で固めて、自分の都合をつけてゐるのだつた。

「唯の問題と違ひますわ。訊いても、兄さんは本當のこと仰有り悪いでせう」

「それは多少ありませうけれど」

「お母さんと私とケンさんで計らひましたの。此方が悪いに定つてゐるんですから、あやまる外に仕方ありませんわ」

「さあ、僕にも一寸御相談下さると宜かつたです」

「あなたは駄目よ、相手が相手ですから、人格者の出る幕ぢやありませんわ。大變なものね。あのお手紙が一通十圓よ。五十八通で五百八十圓」

「は、あ」

「それでもケンさんが値切つて下すつたんですわ。初めは二千圓といふお話でした」

「馬鹿々々しくて聞いてゐられません」

「稲垣さん、あなた、少し何うかしていらつしやるのね？」

「いゝめ」

「私達が一生懸命になつて解決したことを、そんなに頭ごなしになさらなくても宜いでせう？」と純子さんは少し御機嫌が悪かつた。

「……………」

「ケンさんも今度は寢食を忘れて奔走して下さいましたのよ」

「又何をか言はんやです」

「普段は普段でも、斯ういふ時認めて上げなければ不公平ですわ」

「僕は認めません」

「何故？ 稲垣さん」

「仁科のした事は恐喝取財です。ケンさんはその幫助に骨を折つたんです。何方も法律上の罪人です」と僕は公憤に壓倒されてしまつた。

「……………」

「お分りになりませんか？」

「相手の悪いことはケンさんも認めてゐますけれど、問題になれば家の名が出ますから、大切を取つたんですわ」

「問題にはなりませんよ」

「新聞に出ますわ」

「いや、そんな下らないことを書く新聞はありません。あなたもお母さんもケンさんに瞞されていらつしやるから駄目です」

「稲垣さん、私、もう失禮致します」

と純子さんは立つて、戸口の方へ急いだ。  
「お待ち下さい」

「………」  
「純子さん、僕が悪かったです」

「………」  
「純子さん」

と僕は後を追ったが、純子さんは速い。もう階段を下り始めてゐた。僕は階下で追いついた。

「純子さん失禮致しました」

「宜いわよ、もう」

と純子さんは聲を勵まして、廊下傳ひに母屋へ駆けて行つてしまった。折から光岡君の部屋の戸が開いて、

「何うしたんだい？」

と光岡君が呆れたやうに訊いた。

僕は甚だ具合が悪かつたが、疾しいところは些つともない。誤解されては困ると思つて、そのまゝ、光岡君の部屋へ入つて行つた。

「何うしたんだい？ 一體」

「憤られてしまった」

「彼奴は我儘だけれど、君も氣をつけなければ駄目だよ。君は人格専門だから、御機嫌の取り方を知らない。ケンさんの方が歩が好いと言ふのはそこだ」

「そのケンさんの問題さ」

と僕はつい口を出してしまった。

「ケンさんが何うしたんだい？」

「いや、何でもない」

「話し給へ」

「内證だ。純子さんに封じられてゐる」

「はてな。ケンさんのことで内證で純子が封じる……」

「役目の立場だから追究しないでくれ」

「知らなければ兎に角、然う匿されると尙ほ聞きたくなる。内證で話し給へ」

「實は將來の参考の爲め君の耳に入れて置きたいことだ。餘りだと思つて、僕も憤慨してゐる。しかし必ず含んでくれるか？」

「大丈夫だ」

「今もその問題で純子さんがお冠を曲げたんだから、僕が喋べつたことが分ると、僕はもう脈がな

い。しかし僕としては憤慨に堪へないことだから、君に話して警戒するのが友情だらう」  
「何だい？」

「その爲めに何うするの斯うするのと憤り出しちゃ困るぜ」  
「前置が長いんだな。早く話せ」

と光岡君は待ちもどかしたがった。

「仁科の問題はお母さんと純子さんがケンさんに相談して解決したんださうだ」

「ふうむ」

「赤いリボンで束ねた手紙は一通十圓だ。五十八通で五百八十圓」

「……………」

「僕は呆れてしまった。ケンさんは責任を負つたんぢやない。仁科のサクラだ。取引の手傳ひをして  
ゐるんだ」

と僕は純子さんから聞いたところに自分の解釋を加へて、納得の行くやうに話した。

光岡君は頭を抱へて、机の上につつ伏した。肩が息で動いてゐる。興奮したなと思つた刹那、ニヨ  
キツと立ち上つて、戸口の方へツカツカと進んだ。

「何處へ行く？」

「會社……………」

「君、困るよ」

「ケン公……………」

「僕が困る」

「放せ」

「君、含むと言つて置いて何だい？」

「……………」

「僕の立場を察してくれ」

「……………」

光岡君はもう口がきけなかつた。しかし僕の爲めに我慢してくれたのらしい。又頭を抱へたが、今  
度は縁側へ出て、椅子に腰を下ろした。相變らず息で肩が動く。僕は心配で溜らない。僕の話したこ  
とから問題が起れば、僕は純子さんの信用を失ふ。それでなくても、もう御不興を蒙つてゐるところ  
だ。と見ると、光岡君は庭へ歩き出た。それから広い芝生の上を走り始めた。一周又一周、五六回猛  
烈に駆け廻つた。牛が角を立て、疾走する時のやうな恰好だつた。それから芝生の真中に倒れてしま  
つた。僕が駆けつけたら、大息をつきながら、頻りに泡を吹いてゐた。

「もう宜い。心配するな」

「大丈夫か？」



「うむ。醜態を演じた」

「何うしたんだい？」

「僕は本當に憤ると、こんなになるんだ。相手がゐなくて仕合せだった」

「その勢ひでやられたんぢや命が危いよ」

「うむ。それだから自分でも氣をつけてゐるんだけれど」

「駈け出すと氣が休まるのかい？」

「これは本能的にやるらしい。ゐても立つても我慢がし切れない。駈け廻ると疲れるから、後が落ちつく」

と光岡君はもう冷靜に戻つてゐた。僕はこの時初めて光岡君の猛獸的正體を見届けた。天才の閃きがあると同時に、斯ういふ暗黒な半面がある。

この日は僕に取つて一種の厄日だったから、詳しく書く。それから二人は湯に入つた。僕は光岡君の落ちついたのを見澄まして、

「先刻の話は含んで置いてくれ給へよ」

と念を押した。

「宜いとも」

「済んだことはもう何と言つても仕方がない」

「呆れ返つた不徳漢があるものさ。僕は面皮を剝いでやる」

「今直ぐは困るよ」

「僕の顔を潰したのみならず、母と妹を籠絡してゐる。親父に言つて首にしてやる」

「含んで置く約束ぢやないか？」

「麴町が悪いんだ。奴を増長させてしまつたんだ」

と光岡君は又興奮し始めたから、僕は急いで話題を換へた、

夕食の折、光岡君は頻りにお母さんと純子さんを睨んだ。僕は心配で溜らない。目で頼んだ。決して言つてくれるなといふ意味だった。これは世間話をして紛らす方が宜いと思つて、

「純子さん、もう悉皆夏氣分になりましたが、あなたは海が好きですか？ 山がお好きですか？」とやつて見た。

「さあ。私、山よ」

「僕は海です」

「稲垣さんは人が右と言へば左と仰りたい御性分ね」

と純子さんは先刻のことを未だ根に持つてゐるやうだった。

「そんな旋毛曲りぢやない積りですけれど」

「兄さんは山よ。私の組よ」

「僕は河童ですから、何うしても水のあるところが宜いんです」

「私、今年は山に定めてゐますの」

「それちやお供が叶ひませんな。尤も僕は休暇になり次第郷里へ歸りたいと思つてゐます」

「ケンさんは調法ね。海も好き山も好きですから、水陸兩棲よ」

「は、あ」

「彼奴は蛙だ」

と光岡君が喝破した。その後を言はれては大變だから、僕は手を合せて拜まないばかりだつた。

「卓爾や、今日お父さんからお電話がありましたよ」

とお母さんが言つた。光岡氏は先頃から關西方面へ出張してゐた。

「は、あ」

「もう四五日かゝりますつて」

「今度は長いですな」

「出序に悉皆御用をお片付けになるんでせう。忙しいけれど血壓の方も異状がありませんから、安心するやうと仰有いました」

「は、あ」

と光岡君は甚だ無愛想だつた。

その晩、僕は引き續いて光岡君のお相手をした。散歩に誘つたけれど、厭だと言ふから、部屋で話し込んだ。又芝生を駆け廻つたりすると可哀さうだと思つて、氣分の轉換を心掛けてやつたのである。しかし悪い時は何處までも悪いものだ。

「卓爾君、何うだい？」

と言つて、人もあらうに當面の問題のケンさんがノメ／＼と入つて來た。僕は遮る暇がなかつた。

光岡君は猛然として驟起するが早く、ケンさんを突いてかゝつた。ケンさんは仰向けに倒れるところを壁に弾ね返されて、廊下の方へよろめいた。矢つ張り機敏だ。そのまゝ庭へ飛び下りて逃げ出した。光岡君は追つて行つた。僕も續いた。暗闇の晩だつた。

ケンさんは無論母屋へ志した。しかし地勢に通じない悲しさ、銀杏の樹の根つこに躓いて轉んだところを光岡君に取つ捉まつてしまつた。

「不徳漢！」

と光岡君はもう第一撃を食はしてゐた。

「何だい？」

「覚えがある筈だ」

「……………」

「貴様はおれを欺いた。母と妹を欺いた」

「そのことなら辯解がある」

「その手は食はない」

後は亂打だった。しかしケンさんは覺悟が好かつた。一向抵抗しなかつたから、光岡君も拍子抜けがした。

「君、もうやめ給へ」

と僕が制した。

「こんな奴は撲つても張合がない」

「……………」

「歸れ！ もう出入りを差止めろ」

「僕は一朝の誤解で長年の交際を絶つのは迷惑だ。撲るだけ撲つて、辯明を聞いてくれ給へ」

「聴かない。歸れ！」

「歸れと言ふなら、今夜は歸るけれど……」

とケンさんは立ち上つて、

「稲垣君」

「何ですか？」

「君は僕の撲られる見張番をしてゐたね」

「そんなことはないですよ」

「覚えてお給へ」

「文句を言はずに早く歸れ！」

と光岡君が呶鳴つた時、玄關の少年と女中達が駈けつけた。

「卓爾や、卓爾や」

と母屋の縁側からお母さんが呼んだ。純子さんの姿も認めることが出来た。光岡君は跣足のまゝ母屋へ上つて行つた。僕は自分の部屋へ引き取つて小さくなつてゐた。責任がある。喋べらなければ、斯ういふことにならない。ケンさんが悪いに相違ないけれど、もう済んでしまつたことだから、矢張り黙つてゐれば宜かつたと後悔した。

翌日から純子さんとお母さんの態度が目に見えて變つて來た。食事の折、顔を合せても、碌々言葉をかけてくれない。元來僕の地位は家の人達の心境次第で客分にもなれば居候にもなる性質のものだから心細かつた。同時に今までの己惚が清算されたやうな氣持がした。それやこれやを考へて、二三日煩悶してゐるところへ無名の葉書が舞ひ込んだ。

「有難う。お禮は必ずする。それはそれとして例の問題は汝が汝なら當方も爆彈勇士だ。心得ろ」といふのだつた。無名だけれど、見當はついてゐる。

「君、これはケンさんの筆蹟だらうね？」

と僕は光岡君に葉書を見せて確めた。

「遠ふよ」

「それちや用心棒が代筆したんだらう」

「然うらしい。有難いぞ、これは」

「君は僕がひどい目に會ふのを喜ぶのかい？」

「そんなことはないけれど、僕は彼奴に未だ取引が残つてゐる。貸しがあるんだから、おながらにして債務者に繞り合つたやうな心持がする」

と光岡君は自分の書いた手紙を一通十圓の割合で買はされた恨を忘れない。

「僕は経緯もないのに迷惑だ」

「矢つ張り僕の豫言は當つてゐるだらう？」

「このお禮といふのがそれに相違ないけれど、爆弾勇士つてのが分らない。何ういふ意味だらうね？」

「さあ」

「爆弾を持つたまゝ抱きついて、兩方一遍に破裂する？ 然ういふ脅かしかな？」

「その邊だらう」

「稚氣を帯びてゐる」

「いや、それが眼目だよ。その宣言の爲めに、これを書いたんだ」

「しかし爆弾は手に入らないよ」

「譬へさ。奴、イヨ／＼純子を諦めたんだ。しかし同時に汝にも渡さないと云ふんだ」

「成程」

「自分も殞れる代りに汝も殞す。爆弾勇士のよつて来る所以だらう？」

「成程。夜が明けたやうだ。ハツキリ分つた。君は豪い」

「喧嘩は手でも口でも名人だ。相手の心理が直ぐに讀める」

「これはもうケンさんの思惑通りになりかけてゐる。僕も見込はないよ」

「何故？」

「あれから純子さんは口をきいてくれない」

と僕は愚痴になつた。

「差當り多少は仕方があるまい。君が約束を破つたから憤つてゐるんだ」

「破らせたのは君だよ。君も約束を破つてゐる」

「しかし外科手術の方が早い。今に分る」

「何う分る？」

「無競争になつたんだから、若し巧く行かないやうなら、誰を恨むこともない」

「競争よりも悪いんだ。先方はもう破れつかぶれだから、徹底的に妨害する。僕の私行を發くかも知

れない」

「何か發かれることがあるのかい？」

「ないけれど、捏造する。もういろ／＼、やつてゐるんだ。僕は居心が、悪くて仕方がない」

「まあ／＼、辛抱してくれ給へ。今に何うにかなる」

「お母さんも純子さんも君には寛大だ。身最良で仕方がないんだらうけれど、今度のこと全然僕の責任にしてゐる」

「そんなことはないよ」

「いや、あの翌日、お母さんに申譯を言つたら、「汽車が脱線したんでございますわ、ポイントマンの不注意で」といふ御挨拶だつた。僕は返す言葉もないぢやないか？」

「ふうむ」

「純子さんとは見ると、凝つと睨んでゐるんだ。僕はソコ／＼にして逃げて来た」

「それつきりかい？」

「うむ。そのまゝの感情がお互に固定してしまつたんだから、僕も居心地が悪いんだ。以前なら直ぐに下宿へ歸らせて貰ふ法もあるんだけれど、この際だからね」

「お禮は必ずすると書いてあるよ」

「それだからさ」

「態々殺されたがることもなからう。まあ／＼、こゝで辛抱するんだよ。その中には何うかなる」

と光岡君は慰めるのだから脅かすのだから分らない。

### 晴曇交々來る

純子さんは矢張り口をきいてくれない。食事の時に顔を合せるから、挨拶を心掛けるけれど、單に頷くばかりで、直ぐ横を向いてしまふ。謝罪にも辯解にも、取りつく島がない。秘密を裏切つたといふものゝ、事情已むを得なかつたのである。責任は當然光岡君にある。お母さんもお冠を曲げてゐる證據に、言葉遣ひが急に改まつた。僕は努めて話しかけるけれど、いつもと調子が違ふから、御機嫌が取り切れない。ケンさんはお母さんの親類の親類の又親類だと聞いてゐる。縁が薄いから大したことはあまると思つたが、年來深く取り入つてゐるのだつた。それを光岡君が叩き踏したのである。光岡君が悪いに定つてゐる。しかし我が子のことは棚へ上げて、その導火線になつた僕を恨む。僕が追ひ絶つて止めたことは認めてくれない。ケンさんの申立てをそのまゝに信じてゐるのらしい。此方は全くの他人で新參者だから、斯うなると立場がない。

「光岡君、僕は矢張りこの際責任を負ふことにしたい」

と僕は又二三日形勢を見た後、決心して切り出した。

「何うするんだい？」

「善導係を辭して下宿へ歸る」

「僕に面當てかい？」

「そんな意味ぢやないけれど、僕はもう自分の立場を考へるのが面倒になつた。何が何だか分らな  
51

「頭の統一がつかなくなつたのかい？」

「然う解釋して貰つても宜い」

「それぢや責任を負ふどころぢやない。無責任も甚だしからう？」

「何でも構はないんだ」

「そんな分らないことを言つちや困るよ」

「理窟はないんだ。厭になつてしまつたんだから」

「それぢや男と男の約束つてものは何うなるんだい？」

と光岡君は高壓的に來る。刎頸斷金を何處までも利かせる積りだ。

「家の人達の態度が一變すれば仕方がないだらう？ 僕はもう居悪いんだ」

「そんなに變つたのかい？」

「純子さんは矢つ張り口をきいてくれなう」

「すると、君は何かい？ 純子と話をするのが目的でこゝにゐるのかい？」

「然う思つてゐるなら、それでも宜い」

「冗談だよ」

「僕は本氣で相談してゐるんだ」

「歸るのかい？ それぢや」

「我儘で濟まないけれど、然ういふことに計らつてくれ給へ」

「今直ぐか？」

「早い方が宜いけれど、今直ぐといふと角が立つだらうね？」

と僕は純子さんを諦めるにしても、その邊の考慮がある。人格者として招聘されたのだから、後を濁して行きたくない。

「無論立つよ。殊に父が留守だ。後から純子と母が叱られる」

「お父さんの歸るまで待たう」

「父は何と言ふか知らないが、差當り辛抱してくれないか？ 今君に行かれてしまふと、僕はケン

さんとの喧嘩が負けになる」

「斷つて置くが、僕は君の喧嘩の都合を計る爲めに來てゐるんぢやないんだぜ」

「それは分つてゐるけれど、君が歸ると言ふのは要するにこの間からの經緯が原因ぢやないか？ 僕は

は見す／＼ケンさんの術中に陥るのが忌々しいんだ」

「離間策か？」

「同時に爆弾勇士さ。自分も玉砕する代りに、君にも純子を渡さない方針だ。純子も母も差當り籠絡されてゐる。轉んでも只起きない人間があれ丈け痛めつけられたんだから、直ぐ又何かやつてゐるに相違ない」

「成程」

「君も男の意地がありさうなものだ。態々敵の思ふ壺に嵌まるのかい？」

「さあ。しかしもう望みがないんだ」

「それだから歸ると言ふなら、僕との約束は何うなるんだい？ 主客顛倒ぢやないか？ 言ふことに筋が立つてゐない」

「自分にも分らないんだ。理窟で責められると困る」

「君、本郷へ歸れば、用心棒が喜ぶよ」

「警察つてもものがある」

「何うせ撲られるものなら、踏み止まつて、爆弾勇士に犬死をさせてやる方が宜いだらう」

「然う行けば申分ないんだけど」

「撲られてもかい？」

「うむ」

「本音を吹いたね」

「しかし何うしてくれる？」

「待つてくれと言つてゐる。君が行つてしまふと、僕はケンさんの用心棒と顔を合せる機会がなくなるんだ」

「仁科は本當に僕を撲るか知ら？」

「ケンさんの立場を考へて見給へ。爆弾勇士として成功した丈けちや五分五分だ。僕に撲られた分が債務になつてゐる」

「それを僕に返すのかい？」

「均等な男だよ、然ういふことは」

「しかし僕に返すのは筋が違ふ」

「返し易いところへ返すのさ。仁科だつて僕の手紙でタンマリ儲けさせて貰つてゐるから、何か一つ手柄を立て、ケンさんの恩義に酬いたところだ。僕は明日の朝太陽が昇ると同じ可能性だと思つてゐる」

と光岡君は又脅かして僕を引き止める積りだつた。

「あゝ〜」

「悲鳴を揚げたね」

「いや、仁科の問題ぢやない。考へて見ると、僕はこんなことになるのが當り前かも知れない。苟くも善導係と名のついてゐるものが喧嘩の渦中へ巻き込まれたんだから、自分で自分の地位を爆破したやうなものだ」

「然う考へるのが君の好いところさ。それ丈けでも君は人格者だ」

「もうよしてくれ給へ」

「ケンさんとは違ふ」

「あんな奴と同じにされちや溜まらないよ」

「いや、對照が餘り際立つてゐるからさ。ケンさんつて人間は何んな悪いことをしても、自分が損をしない限り、決して責任を感じない。君はアベコベだよ。厄介な性分だ。人の責任まで背負ひ込んで、クヨ／＼思つてゐるんだから」

「しかし渦中の人だもの、全く責任がないとは言へない」

「この問題は君がゐるゐないに拘らず、早晚起つて来るものと思つて、僕は以前から對策を考へてゐたんだ。ケンさんは何方にしても策動する。そこへ仁科の恐喝問題がカチ合つたんだ。これだつて、君がゐるゐないに關係なく必然起つて来る性質のものだらう。君は偶然ケンさんの通り道に居合せたものだから、正面衝突をしてしまつたんだ」

「それにしてもさ。僕だつて全然傍杖ぢやないんだから」

「人間だ。仕方がないよ、行きが／＼りつてもものは、僕も喧嘩はこれが最後の積りだ。その代り徹底的にやる」

「僕が行つてからにしてくれ給へ」

「いや、君がゐなければ始まらないんだ。問題は一旦片付いてゐるんだから、仁科と再び交渉の切つかけがない」

「すると僕が附か？」

「そんな含蓄になるけれど、今度丈けは正義の爲めに辛抱してくれ給へ。婦女子を恐喝して金を取つて行つた奴だ。指を銜へて引つ込んぢやゐられない。その代り僕はこの問題を解決したら更生一新する。君も乗りかけた舟だから悉皆見届けてくれ給へ」

「厭だよ、喧嘩なんか見届けるのは」

「喧嘩ぢやない。僕の更生一新を見届けるんだ。刎頭斷金の約束ぢやないか？」

「すると今までの更生一新は嘘だつたのかい？」

「嘘つてこともないが、掛聲丈けだつたやうな氣がする。今度の本氣だ。君の善導係だつて、一種の掛聲だつたぢやなからうか？」

「それだから責任を感じるんだ」

「いや、咎めるんぢやないんだよ」



「僕だつて、君が眞剣になれば、思ひ切つて活躍出来るんだけれど」

「眞剣になるよ」

「喧嘩の時丈けだらう？」

「いや、これでナカ／＼考へてゐるんだ。まあ／＼、長い目で見てくれ給へ」

「君と僕丈けなら問題はないんだ」

「周囲との關係が複雑して來るから、煩悶が起るのさ。しかしそこを巧く切り抜けるのが社會生活だらう？ 面白くないからつて一々逃げ出したんちや仕舞ひには山へ入らなければならぬよ」

「踏み止まるかな？ それぢや」

と僕は却つて光岡君に啓發されるやうな氣持がした。善導係といふものゝ、此方は學校の成績が好い丈けで、世の中のこととは先方の方が餘計分つてゐる。この際下宿へ歸ることに確かに危險が伴ふ。それにこのまゝ退却してしまつては全くケンさんの思ふ壺だ。僕は矢張り現状維持に傾いた。詰りめ腹は最後に切れば宜い。もう一方仁科の方は用心次第で圓にならなくても済む。僕が撲られさへしなければ、光岡君も手を出す切つかげがつかない。

翌日、光岡氏が關西出張から歸つて來た。實は僕はお父さんに對して最も深く責任を感じてゐた。今まで書齋へ呼ばれる度に好い報告をした。安心させて置いて、ジリ／＼と効果を擧げる積りである。出張中に事件が起つてしまつたのである。

「何うですかね？」

と光岡氏はその晩、食堂で顔を合せた時、僕が進み寄つて挨拶を済ませると直ぐに訊いた。尤もこれが口癖だ。

「さあ」

「元氣好くやつていらつしやいますか？」

「はあ。お蔭さまで」

「お父さん、僕はケンさんを撲りましたよ」

と光岡君がその後から告白した。

「ふうむ？」

「稲垣君はその責任を負つて辭職を申出すかも知れませんが、若し悪かつたとすれば僕が悪かつたんですから、お取り上げにならないで下さい」

「又亂暴をやり始めたのかね？」

「いや、正義の制裁です」

「お前の正義は當てにならない。まあ／＼、後からゆつくり聞かう」

と光岡氏は久しぶりの團圓だった。お母さんも氣を利かして、一切問題に觸れなかつた。

後刻、光岡君はお父さんの書齋へ呼びつけられた。僕も或は参考人として引き出されるのだらうと

思ふと落ちつかない。部屋の中を彼方此方歩いてゐたら、果してコツ／＼と戸を叩くものがあつた。丁度戸口のところへ廻つて行つた時だつたから、殆んど同時に此方から開けて見た。女中だと思つたら、純子さんだつた。

「これは失禮」

「突如聞いたものですから」

と純子さんも驚いたやうだつた。

「何うぞ」

「いゝえ、令狀を持つて伺つたんでございますから」

「はあ？」

「恐れ入りますが、お父さんのお部屋まで御足勞を」

「あゝ、然うですか？ 承知しました」

と僕は直ぐに部屋から出た。

「稲垣さん、一寸お待ち下さい」

「はあ」

「申上げて置きたいことがございますから」

「何うぞ」

「あなたはお憤りになつていらつしやいますの？」

「いや、そんなことはありません」

「兄から伺ひましたが、もう本歸りになるんでございますつてね？」

「さあ。未だ定めてはゐませんけれど、早晚然ういふことになりませう」

「何故兄をお見棄てなさいますの？」

「見棄てるなんてことはありません。元來此方がお役に立たないんですから」

「父にも然う仰有るお積りでいらつしやいますか？」

「はあ」

「お考へ直しを願へませんでせうか？」

「さあ」

「私、實は兄から叱られましたの」

「何うなすつたんですか？」

「私の態度が好くないからあなたがお歸りになるんですつて」

「そんなことはありません」

「いゝえ」

「決してそんな意味ぢやないんです」

「私、この間から自分でも意識してゐますわ。態度が變つてゐるでせう？」

「はあ。少し……」

「私だつて、秘密を裏切つて置いて碌々謝罪もなさらない方に然うく好い顔はしてゐられませんわ」  
「僕、本當に済みませんでした。實は早速お詫びを申し上げたいと思つたんですけれど、機會がなかつたんです」

「私、あなたがおあやまりになれば、私もあやまりますわ」

「あなたからあやまつて戴く筋はありません。僕丈け悪いんですから」

「でも、あなたを困らせるのが面白かつたんですから」

「は、あ」

「それ丈けはあやまりますから、堪忍して下さい」

「僕こそ本當に悪かつたんです。辯解がましいことは申上げません、これに懲りて、以來屹度眞みます」

「以來と仰有るからには矢張り兄の善導係をお勤め下さいますの？」

「はあ」

「お歸りにならなうで？」

「はあ」

「安心しました。さあ。参りませう」

と純子さんは先に立つて、階段を下り始めた。

「僕……」

「はあ？」

「今まで通りに御相談を申上げて宜いでせうか？」

「結構よ」

「有難うございます」

「考へて見ますと、あなたも少し兄さん組ね」

「何ですか？」

「強情よ」

「さあ」

「早くあやまりにいらつしやらないんですもの」

「見込が立たなかつたんです。劍もほろゝの御態度でしたから」  
「怖かつたでせう？」

「はあ」

「私、本當に憤つてゐたんですから」

「もう懲りました」

「でもお薬が少し利き過ぎましたわね」

「顧問がなければ勤まりませんから、殆んど辭意を固めてゐたんです」

「済みませんでした」

「いや、此方が悪いですから、仕方ありません」

と僕は機會を充分に利用した。

光岡君はもうお父さんの書齋にゐなかつた。

「さあ、何うぞ」

とお父さんは唯一人僕を請じた。

「失禮致します」

「今卓爾から一部始終を聞き取りましたが、飛んだ御心配をおかけしたさうで申譯ありません」

「いや、僕が行き届きませんでした。實はお詫びに何はうと思つてゐたところです」

「何う致しまして卓爾の考へが足らないから起つたことです」

「……………」

「憤慨は道理ですけれど、思慮分別に缺けてゐます。それから手段が感心出来ません」

「少し亂暴でした」

「相原は貧乏圖でした。華意をもつて計らつて、卓爾に悉皆誤解されたんです」

「……………」

「實は事件後直ぐ私のところへ手紙を寄越ししました。氣の小さい男ですから可哀さうです。撲られた上に進退伺ひです。私はもつと料簡を圖太く持つやうにと返事を出して置きました」

「は、あ」

「あなたは相原と御懇意でせう？ 始終やつて來ますから」

「お目に度々かゝつてゐますけれど……………」

「一つ折を見て卓爾に執り成してやつて下さいませんか？ 親類の端くれになつてゐるのみならず、一

會社の方でも目をかけてゐる男です」

「しかし……………」

「今直ぐは無論駄目でせう」

「はあ、却つて結果が面白くないと思ひます」

「將來で結構です。相原は麹町の兄が信頼してゐる所爲か、何うも卓爾に嫌はれて氣の毒です」

「才人ですから、やり過ぎるんぢやないでせうか？」

と僕は婉曲に貶す外仕方がなかつた。

「頭はよく働きます。多少苦勞をしてゐる男ですから、何でも大ざつばに考へる卓爾とは行き方が違ひます」

「それでは誤解があるのかも知れません」

「損な性分ですよ。善意でやつてゐることが一向徹底しません。卓爾との関係は一高時代からですか、もう長いことになります。始終失策つてゐるんです。いつかも卓爾の爲めに仲裁をして、馬方に撲られたでせう？」

「はあ。あの時は本當にお氣の毒でした」

「あれなんかもよく聞いて見ると、態々身代りになつたんです。人違ひで暗討ちを食ふやうな間抜けぢやありません」

「しかし随分慌てゝりました」

「無論取り繕つたのでせう。身代りと分れば卓爾が憤ります。今度の事件にしても然うですよ。大難を小難で済ませて、知らん顔をしてゐる積りだつたんです」

「は、あ」

「家内とも打ち合せてあつたんですけれど……」

と言つて、光岡君のお父さんは凝つと僕の顔を見た。

「……………」

「卓爾の奴、つい嗅ぎつけました」

「それが問題になつてゐるのでしたら、僕、申上げますが、卓爾君に洩らしたのは僕です。純子さん

から伺つて、内聞にする積りでゐましたが、事情已むを得なかつたんです」

と僕は忽ち自分の倉に火がついたやうに慌て出した。

「いや、單にお話ですよ」

「その爲めに騒ぎが持ち上つたんですから、僕は責任を感じて、實はこの間から卓爾君に御相談申し上げてゐるんです」

「お待ち下さい。私は最初から無條件であなたにお委せしてあります。あなたの御判断でなすつたことに不服は一切ありません」

「しかし僕が切っかけになつてゐるんですから」

「責任を負ふなんてことは決して仰有らないで下さい。あなたの善意はよく分つてゐるんですから」

「……………」

「後始末ですよ、問題は。これにお互の誤解から起つたことです。あなたが先づ相原の善意を誤解して、卓爾に注意をなさいました。卓爾は元來相原を誤解してゐますから、一も二もありません」

「……………」

「相原は恐らくあなたの爲めに卓爾に撲られたと思ひ込んで、あなたを誤解してゐるのでせう」

「はあ」

「喧嘩ぢやありませんが、これは兩成敗です。相原には私から言ひ聞かせますから、今まで通り快よ

く付き合つてやつて下さい』

「……………」

「お互に卓爾の爲めを計つたんです。善意を穿き違へてゐては詰まりません」と光岡氏は悉皆誤解してゐる僕は當り前なら反駁して突つ弾ねるところだけれど、純子さんと和解が出来てゐるから、又硝子の家に住む人の立場だった。意氣地がないやうだけれど、ケンさんと仲を直すことに必ずしも異存がないやうに受け答へをして引き下つた。何うせケンさんは差當りノメくと來られた義理でない。此方からあやまつても堪忍しつこないから大丈夫といふ肚だった。光岡君の部屋へ報告に寄つたら、純子さんが來てゐた。

「何う定つたい？」

と光岡君が訊いた。二人で僕の去就を問題にしてゐると見て取つたから、僕は純子さんの氣を引いて見る積りで、

「承知して貰つて來たよ」

と力なげに答へた。

「ふうむ？」

「もうお別れだ」

「本當かい？」

「うむ」

「稻垣さん」

と純子さんが眞剣な聲を出した。僕はそれを聞きたかつたのである。

「ハッハ、ハ、」

「嘘だらう？」

「うむ。矢つ張りお世話になります」

と僕はつい光岡君よりも純子さんに重きを置いてしまつた。

「心配させやがった。昨日今日の権幕ぢや或は見込がなからうかと思つてゐた」

「僕だつて本氣になつて考へたんだ。これに懲りて、以來慎んでくれ給へ」

「氣をつけろ」

「婉曲に責任を問はれたぜ。少し耳が痛かつた」

「何んな具合だつたい？」

「後から話す」

「宜いぢやございませんの？」

と純子さんはもう悉皆御機嫌が直つて、事件以前の態度に戻つてゐた。

「いや、うつかりお饒舌りをすると又大變ですから」

「敵討ち？」

「はあ」

「私は大丈夫よ、あなたと違つて」

「早速返り討ちです。ハツハ、」

「でもお邪魔なら、私、彼方へ参りますから」

「いや、構ひません。別にお小言つてほどのこともなかつたんですから、御参考の爲めに申し上げます。要するに今度のことはお互同志の誤解から起つてゐると仰有いました。兄さんと僕がケンさんの善意を誤解してゐるといふことはお母さんと同じ御意見でした」

「私も同感よ、本當のところは」

「ケンさんの主張によると、次郎公に撲られたのも態々兄さんの身代りを買つて出たんださうです。僕は單に人違ひでやられたと誤解してゐました」

「あの野郎は實に太い奴だ」

と光岡君は猛獸が唸るやうに言つた。

「太いか細いか知らないが、機敏なものには驚いた。もう悉皆手が廻つてゐる。此方は齒も立たない」

「父まで籠絡してゐるんだから、女子供は朝飯前だよ」

「女子供つて、お母さんと私のこと？」

と純子さんが訊いた。

「然うさ」

「少し失禮ぢやありません？」

「それぢや婦女子と訂正してやる」

「籠絡なんかされてゐませんわ、私達」

「今に目の覚める時が来るよ」

「誤解が確かにありますわ、兄さんは。私、ケンさんの敵員ぢやありませんけれど、初めから悪いものにしてしまふのは可哀さうよ。公平に見て上げなければ」

「宣傳が利いてゐるんだね、矢つ張り」

と光岡君は持て餘した。

僕の生活は又明るくなつた。純子さんは又富士山を見に僕の部屋へ来てくれる。以前と少しも變らない。純子さんの態度一つで人生を悲觀したり樂觀したりするのだから、人格者も好い加減なものだ。光岡君は仁科の問題で一時狂氣のやうになつたけれど、日のたつに従つて落ちついて來た。しかし全然忘れてはゐない。

「お。君は妙に無事だね」

と時折首を傾げる。

「當り前さ、撲られて溜まるものか？」

「これは切っ掛けがつかず仕舞ひになるのかも知れないよ」

「あの葉書は一時の興奮だらうと思ふ。方々へ取繕つてゐるケンさんが暴力を利用するとは思へない」  
「それちや一人で出歩いて見給へ」

「厭だよ」

と僕は警戒を怠らない。登校も散歩も必ず光岡君と一緒にだつた。

ケンさんは引き續いて姿を見せなかつた。無論寄りつけた義理でもない。これが僕には大きな寛ぎになつた。去るもの日に疎し。この分なら爆弾勇士も犬死を遂げる。杳として音沙汰がないのは有難いと思つてゐたら、日曜に麹町へ行つて来た純子さんが偶然消息を傳へた。夕食の時だつた。

「お母さん、私、今日ケンさんにお目にかゝりましたよ。お頭にお怪我をして、繻帯をしていらつしやいました」

「まあ、何うなすつたの？」

「御自分では電車から飛び下りて失策つたと仰有つてゐましたが、本當は撲られたんですつて。姉さんが仰有いました」

「誰に？」

「あの人よ。悪い人よ」

と純子さんは名を口にすることを憚つた。

「仁科かい？」

と光岡君が勢ひ込んで訊いた。

「はあ」

「何うしたんだらう？」

「美千代さんの問題の續きがあるんですつて」

「ふうむ」

「兄さんは矢つ張り誤解よ。共謀ならケンさんを撲るなんてことないでせう？」

「成程」

「兎に角散々ね。馬方の次が兄さんで、それから又今度ですから二度目よ」

「ひどい怪我かい？」

「頭一杯繻帯でしたわ」

「それは圓いところだもの、部分品がないからだ。しかし日曜にノコノコ出歩くくらいだから、大したことはないんだらう」

「同情がございませぬのね、矢つ張り」

「いや、次第によつてはおれが出る。正義が許さない」



「厭よ、兄さんは、それですから、私、兄さんには申上げない積りでゐたんですけれど」と純子さんは眉を蹙めた。然ういふ表情が却つて美貌を引き立たせると僕は思った。

「卓頭や、これで漸く分つたでせう？ 私、考へが間違つてゐなかつたことが」とお母さんは得意になつた。

「何故ですか？」

「手先を勤めたのなら、ケンさんは後からひどい目に會はされる筈がありません」

「仲間割れつてこともありますよ」

「然う疑つてかゝれば、それまでのお話ですけれど」

「僕、一つケンさんと呼んで訊いて見ませうか？」

「會つて話して御覽なさい。本當のことが分りますから。ケンさんもあのまゝ出入り差止めちや立つ

潮がありませんわ」

「未だ麴町にゐるか知ら？ 純子、何うだらう？」

「晩までのやうでございましたわ」

「電話をかけておくれ」

「厭よ、私」

「何故？」

「兄さんが又正義問題をお起しになりますから」

「それちやおれが出掛ける」

と光岡君は食事中を立つて行つた。

僕は酔狂の沙汰だと思つた。折角遠退いた厄介ものを態々呼び寄せて、再び策動の餘地を與へる。善導係としては干渉しても宜いのだけれど、お母さんと純子さんの手前、然うも行かない。ケンさんは未だ麴町にゐた。光岡君から呼び迎へられることは素より願つたり叶つたりだから、直ぐに伺ふといふ返事だつた。

「光岡君、瞞されないやうに氣をつけ給へ」

「大丈夫だ」

「僕は策を見てゐる。仁科に撲られたと言へば、元來の主張が通る。拵へごとに引つかゝつちや駄目だよ」

「安心し給へ。傷を檢める」

「その必要は確かにある。しかし僕は失敬するよ」

「何故？」

「時間を潰したくない」

「宜いぢやないか？」

「いや、御免蒙る」

と僕は部屋に閉ち籠つて讀書に取りかゝつた。しかし何うも落ちつかない。

「稲垣さん。ケンさんがお見えになりましたから何うぞ」

と間もなく純子さんが呼びびに来た。純子さんが列席するなら、此方も正當防衛だと思つて、直ぐについて行つた。事件後始めてだから、一寸具合が悪かつた。

「ケンさん、その繻帯の謂はれ因縁を承はりたいんだ」

と光岡君は直ぐに取りかゝつた。

「よしてくれ給へ。耻さらしだ」

「構はないよ、内々だから」

「これはこの間電車から飛び下りて、ひつくり返つたのさ」

「嘘をついても駄目だよ。純子が今日麹町から聞いて来たから、一つ呼び寄せて訊いて見ることになつたんだ。場合によつては僕が出動してやる」

「種が上つてゐるんちや仕方がない。しかし会社の方へは電車つてことにしてあるんだから、その積りでゐてくれ給へ」

「よし〜」

「實は仁科にやられたのさ」

「何うして？」

「君には話し悪いんだけど、憤らないで聞いてくれ給へ。美千代さんの問題だ。日外のことは僕が計らひ過ぎた。あやまる」

「宜いんだよ、もう」

「決して悪かれと思つたんぢやない。しかし結果としては悉皆君の感情を害してしまつて、何とも申譯がない」

「済んだことは仕方がない。斯うやつてこの部屋で顔を合せるからには、お互にもう水に流さう」

「然うしてくれ給へ。ところで仁科は未だ不服なんだ。この間僕を呼び出して、もう少し何うかしてくれと言ふんだ。僕は無論斷つた。すると胸倉を取つての談判だ」

「ふうむ」

「力があるから敵はない。「何うだ？」厭だよ」と押し問答が続いた後、弱い奴の運命は分つてゐる」

「撲られたのかい？」

「それがハツキリしないんだ。ガンと來たと思つたが、撲られたのではなくて、投げられた時、石か何かに當つたんだ。僕は往來にひつくり返つて、頭から血を流してゐた」

「何處だい？」

「家の側だよ」

「いや、傷だ」

「こゝだ」

とケンさんは後頭部を振り向けた。僕もよく見たが、實際怪我をしてゐるやうだつた。

「それから何うしたんだい？」

「醫者へ駆け込んだよ」

「仁科は？」

「もつ来ない。然う来られちや溜まらないけれど」

「本當だらうね？」

「嘘をつくものか？ 詰まらない」

「僕は彼奴には勘定がそのまゝ残つてゐる。君の分を合せて清算しても宜いか？」

と光岡君は椅子から乗り出して、競走のスタートを切るやうな恰好をした。

「やつて貰はう」

とケンさんが言下に應じた。

「君、呼び出してくれるか？」

「さあ」

「此方から出掛けても宜いんだ。案内してくれるか？」

と光岡君は一生涯命だ。學問にこれだけ力を入れたら大したものだらうと思ふ。

「手引きをするのは考へものだ。後の祟りが怖い。番地を教へるから、君、一人でやつてくれ給へ」

「何處だい？ 家は」

「板橋區だ。書いて置く」

とケンさんは机の邊へ目をくれた。光岡君が書くものを探しに立たうとした刹那、

「いけませんよ、兄さん」

と純子さんが力強く遮つた。

「構はない」

「ケンさん仰有ると、私、もう絶交よ」

「……………」

「あなただつて又ひどい目に會ひますよ。男のくせに人から叩かれてばかりゐて、恥かしいと思ひま  
せん？」

「卓爾君、僕は言はない。矢つ張りやめる」

「やめてくれ給へ。僕からも頼む」

と僕は制動手として黙つてゐられなかつた。駈引からいへば光岡君の直接行動によつて暗討ちの危

險が解消する次第だけれど、自分の身ばかり庇つてゐられないし、純子さんが控へてゐる。

「今更後へ引くのか？」

と光岡君はむづかしい顔をした。

「仕方がない。後が怖い」

「意気地のない奴だ」

「純子さんも仰る通り、然う彼方此方で衝突されるのは名譽ぢやない。君がやれば、稻垣君が迷惑する。僕はこの上事を起すと會社の方も危くなるから、もう何と言はれても教へない」

とケンさんは思ひ直した。純子さんの脅かしが利いてゐる。

「よし。頼まない。自分で探す。板橋區だつたな」

「うむ。それ丈けは言つてしまつたけれど」

「一軒々々探して歩くぞ」

と光岡君は騎虎の勢ひだつた。しかし姓と區丈けで探せるものでない。板橋區は好かつた。一番廣い區だ。

「ところで用件は何だい？」

とケンさんが訊いた。

「もう済んだ」

「ふうむ」

「僕は君が仁科にやられたと聞いて、一寸思ひ當つたことがある」

「思ひ半ばに過ぎるものがあつたらう？」

「それほどでもないけれど」

「強情だな、相變らず」

「正義の爲めに君の敵討ちをしてやらうと思つたんだが、頭に繻帶をして得意がつてゐるんだからお話にならない」

「得意がつてなんかゐないよ」

「それぢや仁科の番地を教へろ」

「もう駄目だ。君の料簡が分つた」

「何だい？」

「正義は看板で喧嘩が目的だ」

「ハツハ、ハ、」

と光岡君は腹を抱へて笑ひ出した。

「僕だつて盲目ぢやないよ」

とケンさんは少し氣勢を揚げた。

「實は用件がもう一つあるんだ」

「何だい？」

「借りたいものがある。ノートだね、一種の」

「學校のノートなら皆揃へて持つてゐる」

「ノートより小さい。ハガキ大だ。これくらゐだらう。しかし厚い」

と光岡君は大きさと恰好を手真似で示した。

「見當がつかない。ハッキリ言つてくれ給へ」

「貸してくれれば言ふ」

「無論用立てる」

「乾度だね？」

「待ち給へ。念を押すところを見ると怪しい。これくらゐで厚いノートといふと……」

「帳面だよ」

「分つた。いけない〜」

「何だい？」

「宿所帳だらう？」

とケンさんは言ひ當てた。

「ハツハ、ハ」

と光岡君、上機嫌だつた。

「思ひ止まつてくれ給へ」

「仕方がないかな？」

「僕は伯父さんからウンと叱られてゐるんだ。昨今の謹慎振りは麹町から聞いてくれ給へ」

「それちや時節を待たう」

「それは然うと、僕は悉皆安心したよ。斯うやつた僕を呼んでくれるところを見ると、表向きは何と言つても、僕の心持が多少分つて來たんだ」

「さあ」

「差出た計らひには相違なかつたが、全く善意でやつたんだ。而も獨斷ぢやない。お母さんとも純子さんと相談したんだ。純子さん、然うでしたね？」

とケンさんは見返つた。

「はあ。私達こそ正義の主張よ」

と純子さんは厭に公平だつた。

「もう宜いんだよ」

「念を入れないと氣になるんだ。人間、一つの問題にばかり屈託してゐると、妙なことに氣がつく。

僕はこの間外國の雑誌を見てゐたら、手紙一通を千磅即ち一萬圓で買ひ戻した男があつた」

「上には上があるな」

「桁が違ふよ、桁が。君のは十圓だ」

「何處の人間だい？」

「英國人さ。悉皆で五萬磅即ち五十萬圓拂つてゐるから五十通だ。數は君と似たり寄つたりだ。無論君の場合と同じことで、ラヴ・レターだよ」

「おい。好い加減にしろ」

と光岡君は純子さんの手前がある。

「紐育のダブルデーといふ後家さんに出した手紙だ。本人はハロルド・マクコーミックといふ千萬長者だ」

「詰まらないことを詳しく覚えてゐるんだね」

「これでも僕の苦心が分るだらう？ 君に辯明しようと思つて、參考資料にして置いたのさ。あゝいふ取引としては一通十圓は決して高くない。相場があるものらしい。値切つたのを手柄にするんぢやないけれど」

「値切つた分が頭の纏帯になつたといふ次第かい？」

「然うかも知れないよ。して見ると、これが千五百圓についてゐる」

とケンさんは頭に手を當て、見せた。

「何れ將來何とかする」

「そんなことは構はない。僕は理解さへして貰へば満足だ」

「分つてゐるよ」

「有難い」

「もうこの問題は打ち切らう。善意でやつて貰つても、男が潰れたと思ふと癪に障る」

と光岡君は理解は理解、感情は感情だつた。

ケンさんは何うやら信用を挽回した。僕はケンさんが共謀になつて儲けたといふ想像には初めから與さなかつた。矢張り恐喝されて、據らなく計らつたのだらうと解釋してゐる。

先方が一々下から出た所爲か、僕はケンさんと一緒に話してゐても然う不愉快を感じなかつた。これは光岡氏の言ふ通り矢張り善意を誤解されてゐるのかとも思つた。しかし爆彈勇士の葉書がある。麴町の歸りの談判もある。油断は出来ない。兎に角、ケンさんは頭の怪我を切つかけに、又出入りを始めた。純子さんが事件以前に戻つてくれたと思つて安心してゐたら、ケンさんが又在來の關係に戻つてしまつた。

「君、歸るかい？」

と光岡君が度々訊く。もう暑中休暇が近づいてゐる。僕はいつも歸ると答へてゐるけれど、肚の中は未だ本當に定つてゐない。寧ろ日一日、口先とは反對の方へ傾いて行く。純子さんの牽引力を感じると同時に、もう一方、敵手のケンさんが捲土重來の勢ひだ。初めの中は歸り新參何のことやあらんと高を括つてゐたが、何うして、來訪毎に純子さんに取り入つて、メキ／＼と地盤を回復する。仁科に投げられて頭に傷を受けたのを勿怪の幸ひに、光岡君への詫びが叶つたばかりでなく、光岡氏夫婦には元來信用がある。僕としては煩悶せざるを得ない。

「何うですか？ 稻垣君」

とケンさんは僕の部屋へ入つて來て懇談を試みる。態度一變だ。見す／＼狸と思つてゐても、辭を低くして下から出るものを然う無愛想に扱ひ難い。

「やあ、繻帯が取れましたね」

「お蔭さまで」

「傷が残りはしませんか？」

と僕は氣遣ふ風を粧つて、實は檢閲だつた。何うも怪しいと睨んでゐたが、嘘偽りなく、跡が赤く禿てゐた。

「可なり大きいでせう？」

「いや、一寸ですよ。しかしこゝへはもう毛が生えますまい」

「髪で隠れるから大丈夫です」

「お顔でなくて仕合せでした」

「本當です。ひどい目に會ひました」

「矢張り咄嗟の間に頭が働いて、仰向けさまに倒れたんでせう」

「ハツハ、」

「その後もう交渉はないんですか？」

「いや、又來ましたよ」

「はゝあ」

「しかしあやまりに來たんです。尤も僕は留守でしたから、母が應對しました」

「その人が君の用心棒だつてことは本當ですか？」

「御冗談でせう」

とケンさんは外らしたが、少し慌てたやうだつた。僕は時々急所を突いて思ひ知らせてやる。お人好しと見られて、この上つけ込まれては溜まらない。

「しかし御親類だと承はつてゐます」

「はあ。多少縁續きになつてゐますから、僕は首尾が悪いんです。實は伯父さんのお手許まで進退伺

ひを出したくらのみですよ」

「お察し申し上げます」

「僕の用心棒だなんてことを卓爾君が言つてゐるんですか？」

「いや、それは僕の想像です」

「用心棒に撲られる奴もありますまい」

「ハツハ、」

「厭になつてしまひます。君にまで疑はれるんですから」

「僕は参考の爲めに仁科つて人のことを伺つて置きたいんです」

「何の御参考ですか？」

「現に光岡君に對して恐喝を働いた男ですから、僕は自分の立場として多少知つて置く必要があります。學校は何處を出たんですか？」

「某私立大學と申上げて置ませう」

「職業は？」

「未だ何處へも勤めてゐません。當り前なら、僕から伯父さんにお頼みして會社へ入れて貰ふんですけれど、成績が好くない上に亂暴ですから、何うも仕様がなひんです」

「恐喝なんかするところを見ると、家庭が困つてゐるんでせうか？」

「いや、相應の家庭ですよ」

「美千代さんとは本當に戀愛關係があるんでせうか？」

「それは確實です」

「しかしそんな不良青年に何うしてあの精巧な美千代さんが傾倒してゐるんでせうか？」

「不良ぢやないんですよ。單に亂暴なんです。先づ卓爾君と似たり寄つたりでせう」

「君は光岡君を仁科と同程度に見てゐるんですか？」

「いや、腕力を用ひる點丈です。僕は兩方からひどい目に會はされてゐますから、然ういふ資格がある積りです」

「成程」

「男性的のところ、美千代さんの氣に入つたんでせう。學問が出来ない代りに、スポーツは何でもやります。必ずしも頭の悪い男ぢやありません」

「柔道が強いんでせう？」

「三段の免狀を持つてゐます」

「それぢや用心棒なんか勤めないで、柔道の先生になれば宜いぢやありませんか？」

「妙に用心棒が問題になりますね」

「ハツハ、」



「先生は腕ばかりぢや勤まりませんよ。人格が必要ですよ」

「成程」

「君のやうな人格者でないと勤まりません」

「来ましたね」

と今度は僕が利かされた。しかしこれだけ念を入れて置けば、仁科に撲られる心配はない。此方も駈引だ。

「ハツハ、」

「人格者だなんて、一種の侮蔑ですよ」

「飛んでもないことです。失禮ながら、君の人格は僕の試験を経てゐます」

「何ういふ意味ですか？」

「それは申上げますまい。勘辨して戴きます」

「僕は何も君から御辯解を受けるやうなことはないと思ひますが……」

「兎に角、僕は懶恨骨身に徹してゐます。生意氣にも君の人格を試す積りで、種々と御無禮を働いて

ゐるんですから」

とケンさんは又芝居だつた。麴町の歸りの脅迫と爆弾勇士のハガキ、それを何とかして帳消しにする工作と僕は認めた。

相手が才物だから、此方も骨が折れる。油断をしてゐると直ぐに乘じられる。形勢重大、これは夏休みになつてもウツカリ歸れないと思つてゐるところへ、或日のこと、純子さんが、

「稲垣さん、あなた、本當にお歸りになりますの？」

と念を押した。

「はあ」

「お歸りになれて？」

「はあ？」

「この際」

「はあ」

と僕は行き詰まつたけれど嬉しかった。此方の胸の中を純子さんがそのまま言ひ當てゝくれたのである。

「お歸りになるとすれば、休暇に入り次第直ぐ？」

「はあ。成るべくなら」

「夏中ズツと？」

「その積りですけれど」

「二月よ、稲垣さん」

「はあ」

「大變ぢやありませんか？」

「早目に切り上げて來ても宜いです」

「呑氣ね、あなたは」

と純子さんは恨んでくれた。僕は益々好成績だと思つて、

「しかし學生ですもの、夏休みは書き入れです」

と圖に乗つて見た。

「すると兄は何うなりますの？」

「學校がないんですから、何うせ遊びです」

「でも、こゝで二月もあなたとお別れしますと、折角落ちついたので又後戻りをしてしまひますわ」

「そんなこともないでせう」

「いゝえ、私、心配でなりませんの」

「何か徴候が見えるんですか？」

「はあ」

「何ですか？ 参考の爲めに伺つて置ませう」

「悪い人のことよ。兄はあれきり口に出しませんけれど、諦めは致しません。ケンさんがひどい目に

會はされてゐますから、又例の正義よ。その中に乾度住所を突き止めますわ」

「仁科の住所ですか？」

「はあ。もう手を廻してゐます。あなた、お氣づきになりませんか？」

「一向」

「駄目ね、制動手のくせに」

「は、あ。責任問題ですか？」

と僕は拍子抜けの氣味だつた。純子さんは僕の爲めに僕を引き止めるのではないらしい。

「私、昨日、兄が電話をかけてゐる時、つい立ち聞きをしてしまひましたの。何とかいふ探偵社らし

SMY」

「は、あ」

「來ましたわ、直ぐに」

「探偵がですか？」

「はあ。兄は待つてゐたやうに出迎へて、應接間へ通しました。何ういふ用件か御想像がおつきになりませう」

「相手が探偵だとすれば、無論仁科の調査をお頼みになつたんでせう」

「それに相違ございませんわ」

「しかし變です。現に今朝ですよ。近い中に大悟一番するから驚くと言つてみました」

「それがオハコよ。何か仕出來す前には安心させますの。兄の性格は私の方がよく知つてゐますわ」

「すると風雲急ですか？」

「もう差し迫つてゐますわ。この際あなたがお歸りになつてしまへば、後は全く自由行動よ。相手が相手ですから、何んなことになるかも知れません」

と純子さんの關心は矢張り僕の動靜よりも光岡君の身邊にあつた。

「僕、踏み止まります」

「何うぞ。御迷惑でございませうけれど」

「いや、一向」

「實は私、母にも相談致しましたの」

「は、あ」

「矢張り残つて戴き方が安心でございますつて。でも母からはそんな我儘はお願ひ申兼ねますから」

「御遠慮には及びません。元來が制動手つて役目ですから、出勤の必要があれば踏み止まります。多少感情を害しても構ひません。頭張りますよ」

「何分宜しく」

「精々心掛けます。折を見て後から一週間ばかりお暇を戴けば結構です」

「駄目よ」

「はあ？」

「頭張ると仰有るお口の下から直ぐもう逃げることを考へていらつしやるんですもの」

「然ういふ次第でもありませんけれど」

「お暇は差上げられませんわ」

「何故ですか？」

「御質問も許しません」

「絶対ですか？」

「はあ」

「仕方ありません」

「勝手ばかり申上げて濟みませんけれど」

「いや、一向」

「大切のところですから、何うぞ御辛抱を願ひます」

「承知しました。絶対の御命令に服従致します」

と僕は純子さんに恩を着せて、歸郷を見合せることにした。

「ところで何う致しませうか？ 悪い人の問題は」

「さあ」

「住所が知れば、一も二もありませんわ、兄のことですから」

「しかし果して探偵だつたでせうか？ その、昨日来た人は」

「何うも然うらしいのよ。別に探偵らしい風はしていませんでしたけれど」

「探偵つてものは殊に探偵らしい風をしていませんよ。極く當り前です」

「それぢや探偵に相違ありませんわ、極く當り前の人でしたから」

「然う結論も出来ませんけれど」

「でも探偵社から来たんですもの」

「電話をおかけになつた先が探偵社つてことは確實ですか？」

「はあ、探偵社ですかと仰有るお聲を聞きつけて、私、これはと思つて立ち止まつたんですから」

「何といふ探偵社ですか？」

「それがハッキリ致しませんの。でも、それから後は間違ありませんわ。人を寄越して下さいとお頼みしたら、直ぐに駆けつけて来たんですから」

「成程」

「探偵に相違ありませんわ、些つとも探偵らしくないんですから」

と純子さんは僕の定義に當て嵌めて主張を續けた。僕は半信半疑だつたけれど、それ以上立ち入つ

て訊けば、御機嫌を損ねる處があつた。

「兎に角、探偵社へお頼みになつたものと認めて警戒しませう」

「何うぞ」

「これは始終側についてゐる外仕方ありません」

「はあ。それですからお休み中も御無理をお願い申上げます」

「しかし光岡君は山の御別荘へいらつしやるんぢやないんですか？」

「その積りでしたけれど、急に豫定變更よ。夏中此方にて更生一新するんですつて。稻垣さん、更

生一新よ。それで、私、益々思ひ當りますの」

「大悟一番と合致してゐますね」

「危いんですわ、それですから」

「油断をさせるんでせうか？ そんなことを仰有つて」

「はあ。結果から見ると、いつも然うなつてゐます。兄は好いことをしたい時は屹度悪いことをする

んですから」

「何ういふ意味ですか？」

「勉強の決心がつくと怠けますの。それですから、試験前が殊にいけません。あなたもこの春お困りでございましたらう？」

「はあ」

「禁酒の發心をするると浴びるやうに飲みますの」

「アベコベですね」

「つまり名残を惜むんでございますわ。その代り後は當分續きます」

「すると更生一新だの大悟一番だのと仰有るのは差當り餘り香しい徴候ぢやありませんね」

「はあ。標語が大きい丈け餘計心配になります」

「これは特別に警戒を要します」

「何分宜しく」

「あなたは矢張り山の御別荘へお出掛けになりますか？」

「はあ。兄をあなたにお委せして、夏中ゆつくり休養して來たいと思ひますの」

「僕、責任が重いです」

「オホ、、、」

「相談相手がなくなつてしまひます」

「嘘よ。私、兄が參らなければ、參りませんわ」

「それぢやズツと此方ですか？」

「はあ」

「有難いです」

と僕はつい口を迂らせてしまつた。

大賢の出來損ひは何處までも應揚だ。僕が純子さんと協定を遂げたのも知らずに、

「何うだい？ 君、矢つ張り歸るのかい？」

と未だ問題にしてゐた。大悟一番するから付き合へといふのが引き止めの勸誘だつた。

「決心したよ」

「踏み止まつてくれるか？」

「うむ」

「これは有難い」

「矢つ張り必要がある。夏中頑張らう」

「實はその意味から非引き止めようと思つてゐたところだ」

「誤解しちや困る」

「自信があるのかい？」

「そんな關係で踏み止まるんぢやない。君が付き合へと頻りに言ふから枉げて應じたのさ」

「しかし同時にもう一つの目的にも貢獻するぜ。ケンさんが頻繁に押しかけて來るから油斷は出來な

いよ。何んな形勢だい？ 昨今は」

「さあ」

「僕は順調に戻つたと見てゐるんだ」

「何故？」

「君を歸さないやうにと僕に頼んでゐる。無論僕のことを心配してゐるんだらうけれど、君に好意を持つてゐればこそだ。君には直接何とも言はないかい？」

「うむ」

「ケンさんなら、こゝで一つ利かせるところだ」

「何う利かせる？」

「純子の爲めに踏み止まる風をして恩に着せる」

「ハツハ、ハ」

と僕は笑ひ出してしまった。正にそれをやつてゐるのだ。光岡君は矢張り人が好い。

「付き合ふと言つたね、君」

「うむ」

「頼むよ。僕はこの夏休みを期して更生一新する」

「掛聲はもうよし給へ」

「本當にやるんだ。考へて見ると、今までは掛聲時代だつた。しかしそれにしても僕は面目一新して

ゐるよ。妖魔なんかもう完全に御けてしまつて、心にかゝる雲がない。これは矢つ張りお互に大きな運命に支配されてゐるらしい」

「理論よりも實行だよ。更生一新なんて、いつでも出来ることだ」

「然う言ふ君は何うだい？」

「さあ」

「僕に較べれば申分ないけれど、未だ更生一新とは行つてゐまい？」

「無論僕だつて自分に満足はしてゐない」

「それだから、お互に努力しようと言ふのさ」

「うむ。素より異存はない。今から直ぐに始めよう」

「待ち給へ。更生一新、大悟一番」

と光岡君は如何にも、思慮分別を働かすやうに首を傾げて考へ込んだ。

「掛聲時代はもう過ぎてゐるんだぜ」

「僕は豫定を拵へてゐる。夏休み中ウンと暴れたいんだ」

「えー？」

「したい放題のことをして見る」

「そんな大悟一番はあるまじ」

「いや、謝肉祭だ。遺憾なく舊生活の名残を惜んで、それから更生一新する。大悟一番すれば、もう禪僧のやうなものだから、後が淋しいに定つてゐる」

「そんな料簡ちや駄目だよ」

「しかし人間だぜ。この青春を如何せんやだ」

「すると結局何ういふことになるんだね？」

「夏中暴れ廻る。不羈放縱だ。その代り秋風が立つと共に大悟一番する」

「然う手の裏を覆したやうに行くものか知ら？」

「充分名残を惜むから大丈夫だ。カフェーにしても、目ぼしいところを荒してしまへば、ウンザリするだらう。喧嘩だつて、もう澤山といふところまでやつて置く。一言すれば、人生の謝肉祭だ」

「そんなお付き合いは御免蒙る」

「いや、その精神丈で宜いんだ。大したことぢやない。枉げて付き合い合つてくれ給へ」

「冗談ぢやないぜ」

「真剣だよ。僕はこの春から考へてゐる。大悟一番するには先づ人生を空の空と達観しなければならぬ。ついではこの支度をするんだ」

「君のは達観どころぢやない。慾念を恣にしようつてんだから」

「恣にした後が達観さ。凡人はこれを五十年かゝつて自然に遂げる。僕は人爲的に二月でやつて見

ようと思ふんだ」

「何と理窟をつけても駄目だよ」

と僕は制動手の立場から當然反對した。光岡君は自分を非凡人と思つてゐるのが大きな間違だ。それも秀才をもつて任じて努力をするなら兎に角、學問は其方ので生悟りを振り廻すから癪に障る。僕はその邊を突つ込んで、遠慮なく駁撃してやつた。

「それぢや付き合い合はなくても宜いから、長い目で見てみてくれ給へ」

「長い目も短い目もない。そんな馬鹿なことは見てゐられない」

「馬鹿なことつてのは獨斷だらう」

「少くとも惻巧なことぢやないよ。例へば、こゝに一個の非凡人があつて自殺をしようと云ひ出したら、君だつて見てはゐられまい？ それと同じ場合だ」

「自殺ぢやない。大悟一番だ」

「當り前の人間は五十年かゝつて自然に死ぬ。しかし當り前でない人間は人爲的に自殺をして死ぬ。何うだい？」

「何うでもない。問題が違つてゐる」

「いや、似たり寄つたりだ。人間は五十年間有らゆる愚學の雨風に曝されてゐる。當り前の人間は道心の笠笠を着て歩いて、漸く身を全うす。然るに當り前でない人間は素つ裸になつて、五十年分の雨

風を二月の間に満喫したがる」

「この野郎」

「参つたらう？」

「ピクともしないよ。君は情熱を愚學と認めてゐるから、根本が違つてゐる。そんなお説法は庭石に向つてする方が宜い」

と光岡君は扱き下して又主張し始めた。僕も負けない。讓歩すれば役柄が動まらなくなる。夏中馬鹿のあり丈けを盡さうなんてのは元來制動手の存在を無視した相談だ。

議論の最中へ女中が入つて来て、名刺を取次いだ。光岡君は直ぐに立ち上つた。様子が何となく僕を憚るやうだつたから、

「君、誰だい？ 今頃」

と訊いて見た。探偵社を思ひ出したのである。純子さんから警戒のあつた翌晩だつた。しかし光岡君は何とも答へないで出て行つた。僕にサンク〜遣り込められた後だつたから、少し機嫌が悪かつたのだ。

「稲垣さん、探偵よ」

と殆んど入り違ひに、純子さんが戸口から現れた。

「は、あ」

「何う致しませうか？」

「さあ。別に慌てることもないでせう」

「落ちついてゐられませんか。悪い人の住所を突き止めて来たに定つてゐますから」

「光岡君は乾度やりますよ」

「まあ！」

「今も婉曲にその御相談でした」

と僕は議論の一部始終を傳へた。此方が優勢だつたから吹聴の意味もあつた。

光岡君は大分手間を取つて戻つて来た。僕と純子さんが時々監督上の打ち合せをすることは光岡君も承知してゐる。しかしこの際は議論の直後だつたから、僕は何となく気が映して、足音が聞えた時、純子さんから一椅子遠退いた。純子さんも同感だつたと見えて、忽ち話し止んだ。光岡君は入つて来ると直ぐ、二人の間の空椅子の席に手を當てて見た。皮肉だ。温かみを計つたのだつた。馬鹿にするなといふ意味らしかつた。時折大賢らしいところを示す。尤も距ての椅子が如何にも不自然な配置になつてゐたのである。

「兄さん、お客さまは何方？」

と純子さんは一切知らぬ顔だつた。

「畫家だ」



「何て畫家？」

「これだ。個展をやるんだつて」

と光岡君は机の上の案内状を差しつけた。

「あら、これはこの間からありましたわ」

「この間も来たんだ」

「嘘よ」

「ハツハ、ハ、」

「誰？ 本當は」

「然う一々詮索しなくても宜からう」

「探偵社の方ちやございませぬ？」

「これはお前に頼む方が早いかも知れない」

「それ御覽なさい」

「ハツハ、ハ、」

「悪い人を探し出して喧嘩なんかなすつちや困りますわ」

「大丈夫だ」

「いゝえ、私、心配で溜まりませんわ」

と純子さんは僕に一瞥を浴せた。

「大悟一番だ。敵も味方もない」

「然うは言はせないよ」

と僕は出る幕だと思つた。純子さんの目くばせ一つで動くのではない。議論の續きがある。

「何だい？」

「先刻の主張が裏書をしてゐる。喧嘩も充分して置くと言つたぢやないか？」

「ハツハ、ハ、」

「笑つて誤魔化しても駄目だよ」

「参つた」

「本當だらうね？」

「うむ」

「探偵社へ頼んだつてことは今聞いたばかりだが、事實かね？」

「單に念晴らしだ。行動はしない」

「しかし分つたんだらう？」

「仁科つて人間が問題に關係してゐないことが分つた」

「偽名か？」

「うむ、探偵社の人も初めから然う言つてゐた。矢つ張り豪い。商賣は商賣だ」

「名前は兎に角、本人が分つてゐるんぢやないかい？」

「いや、僕も名を騙つて来るやうな奴を相手にする勇氣はない。お蔭で至極簡単に諦められる」と光岡君は僕に目くばせをした。純子さんが案じるから、もう追究するなといふ意味だつた。

「兄さんは發心をなさる時が一番いけませんのよ」

「何故？」

「更生一新なんて仰有つて、油斷をさせるんですから」

「手を知つてゐるんだね」

「度々ですから懲りてゐますわ」

「然う見破られちや仕方がない。敵討は諦める」

「未だ／＼安心出来ませんわ」

「いや、然う素つば抜かれると、制動手が警戒してしまふ」

「稻垣さん、この上とも何分宜しく。兄は向上心の熾な時ほど危いんでございますから」

と純子さんは勝ち誇つてゐた。

その翌々晩だつた。僕は再び渦中に捲き込まれて身に沁みてゐるから、記憶が正確だ。ケンさんがやつて來た。例の通り會社の歸りに寄つたのだつた。僕も仲間に入つて、光岡君の部屋で話し始める

と間もなく、

「ケンさん、僕はこれから君に訊きたいことがある。嘘偽りなく誠意をもつて答へてくれ給へよ」と光岡君が突如切り出した。

「何だい？ 改まつて」

「僕はあれからこの間の問題を研究してゐるんだ」

「ふうむ」

「何處までが君の責任で何處までが龜山の責任かハッキリしない」

「龜山？」

「又の名仁科さ。二つ名のある人間には好いのがないさうだ」

ケンさんは顔色を變へて椅子から立ちかけた。この間で懲りてゐる。しかし光岡君は何處までも穩かな調子だつた。

「安心し給へ。君が紳士的態度を取つてくれる限り、僕も紳士的に行くよ」

「……………」

「僕は自分の都合よりも寧ろ君の爲めを考へてゐる。君も多少將來を矚目されてゐる有爲の青年ぢやないかい？ お互に自重したい」

「……………」

「若しこの間中の辯解で僕が納得してゐると思ふなら、君は僕を見括つてゐるんだ」  
「光岡君、何うするんだい？」

と僕は立場に困つた。

「丁度好い。君は僕の監督者だから、そのまゝ立ち合つてくれ給へ」

「しかしケンさんが迷惑だらう？」

「いや、その方がケンさんも安心だ。君がぬないと僕はつい又痲癩を起すかも知れない」

「相原君、僕、ついてゐます。決してこの間のやうなことはさせません」

「何分宜しく」

とケンさんは覺悟を極めたやうだつた。喉がゴロ／＼鳴つた。固唾を呑む音だ。

「君がこゝで話すことはこゝ限りにする。僕も稻垣君も決して口外しない」

「然う言つてくれれば僕も話し好いんだ」

「手つ取り早いところ、僕は君を龜山の手から救つてやりたいんだが、何んなものだらう？」

「何ういふ意味だね？」

「君は龜山に何か尻尾を捉へられてゐるんぢやないか？」

「さあ」

「何うだい？ それとも對等に交際が出来るのか？」

「何も彼も知つてゐるやうだから匿さない。實は君の察してゐる通りだ。しかしその内容を打ち明ける必要があるのかい？」

「いや、それは君一個人の問題だから、僕が立ち入る筋でない」

「話しても宜いんだけれど」

「いや、聞くまい。出發が分つてゐれば宜いんだ」

「今度のことについて初めから説明させてくれ給へ。實は僕は頼まれたんだ」

「誰に？」

「純子さんに。純子さんの背景には無論伯母さんがゐる」

「成程」

「美千代さんは純子さんの級友だけれど、君の交際相手として引つ張つて來たのは僕だから責任がある。それに美千代さんはあの頃から縁談が幾つもあつて、その間を巧く操してゐたんだ。あゝいふ浮氣つほい人だから」

「銀座の洋服屋の若旦那に札が落ちたんだつてね？」

「うむ。知つてゐるのかい？」

「調査して貰つたんだ」

「今だから言ふけれど、美千代さんは君が一番好きだつたんだ」

「そんなことは何うでも宜い」

「僕としては美千代さんが君のところへ来るやうになれば都合が好いと思つたけれど、伯母さんにも純子さんにも氣に入つてゐないし、柄が柄だから到底むづかしい。僕が因果を含めたんだ」

「それも事實だらう」

「こゝまでは公明正大だつたけれど、僕は君が苦手だ。今までだつて忠告して憤られてゐるから、夢中になつてゐる矢先、眞向から諦めろとは切り出せない」

「夢中つて程でもなかつた積りだ」

と好い鹽梅に光岡君は何處までも懇談の態度だつた。

「そこで自然消滅といふ手段を考へた。美千代さんを遠退かして知らん顔をしてゐれば宜かつたんだけれど、つい龜山に喋つてしまつた。奴も美千代さんに關心を持つてゐる。美千代さんはあゝいふ浮氣者だから、親類の若い男性とは大抵親しく交際してゐる。龜山は愛人なんてことはないんだけれど、自分では相応任じてゐるんだ。僕は龜山が何んな顔をするかと思つて、譚ひ半分に話したんだ。すると奴、本氣になつて憤慨して、君のところへ乗り込むと言ひ出した」

「成程」

「矛盾するやうだが、僕は自發的に君のことを喋つたんぢやない。美千代さんから君の手紙を悉皆取り返して来て、大手柄をした積りでゐるところへ、龜山が遊びに来たんだ。机の上に置いたものだけ

ら、目に留まつた。僕は龜山の己惚を知つてゐるから、妬かせる氣になつて、見せびらかしたんだ。内容は見せないよ。束のまゝだ」

「ひどいことをするんだな」

「無論冗談さ。しかし龜山は憤慨して、君のところへ掛け合ひに行くと言ひ出したばかりでなく、手紙を懐ろに入れてしまつて返さない。僕は今更困つた」

「それから物は相談だと来たんだらう？」

「うむ。因縁をつけて手紙を金にするから手傳へと言ふんだ。僕が仲裁をすれば手柄になるから是非やれつて、頻りに勧めるんだ」

「後はもう分つてゐるよ」

「いや、僕は頑として應じなかつたんだ。しかし龜山は手紙を持つて行つてしまつた。翌晩僕が會社の歸りに寄つたら留守だつた。その翌晩先方からやつて来て、もう君に會つたと言ふんだ。僕は慌てた。次の晩、君のところへそれとなく様子を見に来た」

「うむ。覺えがある」

「僕はあの時君に事情を訴へれば宜かつたんだが、苦手だから、つい差控へた。それに手紙を取られてゐるのが引け目だつた。少しのことなら自腹を切つて取り返す積りだつたが、龜山は一通十圓の五百八十圓だと言ふ。仕方がないから伯母さんに話した。その時も事實ありのまゝを訴へれば宜かつた

んでけれど、僕は善い子になりたかつたんだ。伯母さんは直ぐに小切手を書いてくれた。それと引き換へに龜山から手紙を貰つて君に渡した。こゝに龜山の受取がある」

とケンさんは紙入の中から一通を取り出して、光岡君に手渡した。

「金の行方を問題にしてゐるんぢやないけれど、君もこれで念が晴れて心持が好いだらう。この受取は確かに手紙と同じ筆蹟だ」

「僕はもう一つ念を入れて置いた。小切手に横線を引いて渡したから、金が誰の手に入つたかは銀行を調べて見れば分る」

「そんなことはもう宜いんだよ」

「せめて金の扱ひ丈けでも潔白の證跡を残して置きたいと心掛けたのさ。今更取り繕つても仕方がないけれど、初めて計つてしたことぢやない。僕は意志が弱いから、思ひもかけない方へ持つて行かれしまつたんだ。しかし失態は失態だ」

「もう悉皆分つた。ところで相談がある」

「それはお断りする」

「何だい？ 未だ何とも言つてゐないのに」

「僕の爲めに龜山に正義を行ふつてことぢやらう？」

「察しが早いね」

「それは絶對的に思ひ止まつてくれ給へ」

「何故？」

「龜山も今度のことは後悔してゐる。必ずしも金が欲しくて愛人だと主張したんぢやないらしい。欠つ張り眞剣に然う信じてゐたんだ」

「まさか」

「いや、事實は兎に角、已惚つてものは誰にもあるんだから」

とケンさんが言つた時、僕と視線が行き會つた。告白するから感心だと思つたが、矢つ張り厭な男だ。

「ひどい目に會つてゐながら辯解してやれば世話はない」

「生一本な人間だよ、案外、美千代さんは總花主義だつたから、所謂愛人が大勢あつた。六七人もあつたらう。しかし最近美千代さんの縁談が定つた時、涙を流して泣いたのは恐らく龜山丈けだつたらう」

「僕は平氣だ」

「そこを買つてやつてくれ給へ。僕は龜山を人格者にしないと何うも凄まじいんだ。萬更悪者の手先になつたと思ひたくない」

「しかし現にその後も文句をつけに來たと言ふぢやないか？」

「あれは嘘だ」

「ふうむ」

「序に告白して置く。頭の怪我は電車だよ、飛び下りをして失策つたんだ。然う言つただけけれど、君が妙に誤解してゐるから、これ幸ひと利用したのさ。しかし人間、嘘をつくやうになつちやもうお仕舞ひだ。一つ嘘をつくと、それを全うする爲めに又別の嘘を考へ出す」

「これは驚いた。會ふ度に見舞ひを言つて損をした」

「怪我は怪我だぜ」

「しかし含蓄が違ふ。野郎のことは盗人に追銭だと思つて、そのまゝにする積りでゐたけれど、君が撲られたといふから調査して見たんだ」

「申譯ない。稲垣君、君にも謝罪します」

「いや、結構です」

と僕は調子を合せた。

それから後はもう懇談だつた。光岡君はケンさんよりも龜山を問題にしてゐたのだから、面責らしいことは決してしなかつた。それでケンさんも寛ろいだが、矢張り氣になると見えて、時々辯解を試みた。

「光岡君、僕は覺悟を見せる」

と言つて、紙入を取り出したのもその一つだつた。

「何だい？」

「辞表だ。見てくれ給へ」

「こんなものを何うするんだい？」

「君に責められたら、日附を入れて直ぐに出さうと思つてゐたんだ」

「寝呆けちやいけない。公私混合ぢやないか？」

「いや、君は社長の令息だから、將來の社長だ。僕も會社勤めをするからには出世をしたい。今度のことで君に睨まれるやうなら、今の中に方向轉換を心掛ける」

「それも宜からう。家の會社にばかり日は照らないんだから」

「君、突つ放すのか？」

「いや、君がこんなことで動くなら仕方がないと言ふんだ」

「動きたいなんて氣は毛頭ないんだよ」

「もつとガツチリしなければ駄目だ。出處進退は慎重に考へてくれ給へ」

「大丈夫かい？」

「うむ。僕は何とも思つてゐない」

「安心した」

「しかし君の方から言ひ出したのを幸ひに、一つ忠告してやる」

「何分」

「君はオツチヨコチヨイだ」

「ふうむ」

「もつと男らしくやれ」

「そこは急所らしい。意気地なしだから、今度のやうなことを仕出されたんだ」

「それから小刀細工をするな」

「うむ」

「目先のことばかり考へてゐるから大局が見えない。もつと達観するんだ」

「うむ」

「今度のことを切っかけに大悟一番し給へ」

「悟りを開くのかい？」

「然うさ」

「しかしそれは坊さんのする仕事ぢやなからうか？」

「人間は誰でも大悟一番しなければ眞物にならない」

「何うすれば宜いんだらう？」

「今に僕が模範を示す」

「君も未だやつてゐないのか？」

「實はこれからだ。ついでには相談がある」

「何だい？」

「龜山を撲らせてくれ」

「そんな大悟一番はないだらう」

「ハツハ、」

と僕は笑ひ出した。

戸が開いて、光岡氏がノツソリ入つて來た。珍らしいことだつた。純子さんがお供をしてゐた。僕

達は皆立ち上つて迎へた。

「何うだね？」

と光岡氏は葉巻の煙を吹きながら一同を見渡して、

「相原、お前も來てゐたのか？」

「はあ。お邪魔してゐます。卓爾君の御誘掖を受けに上りました」

「おい、それが小刀細工つてものだ」

と光岡君が窘めた。

「三人寄つて何を論じてゐるのかな？」

「……………」

「俺も仲間入りをしよう。稲垣君」

「はあ」

「何の議論ですか？」

「光岡君が大悟一番すると仰有つたところでした」と僕は素つば抜いてやつた。

「オホ、ハ、ハ」

と純子さんがお父さんに椅子を押し薦めた。

「結構だ。皆大悟一番しなければいかん」

## 大きな油断

暑中休暇に入つた。僕は歸らないで頭張る。何處までも光岡君の制動手だ。側についてゐる純子さんの註文をそのままに引受けたのである。その折、純子さんは兄さんが行かなければ海へも山へも行かないと言つた。結局、僕は光岡君の側にゐれば、純子さんの側にゐられる。人格者も矢張り何か當てのある方が勤め好い。

光岡君は引續いて大悟一番を口にする。言論ばかりでない、休暇になつてから熱心に讀書を始めた。

朝も早い、狸銀杏の下で坐禪を組んでゐることがある。萬事發作的に行く男だから、差當り一心不乱だ。昨今はコーランに没頭してゐる。腕力家だから、マホメットに特別の共鳴を感じるのかも知れない。

「兎に角、發心したね。バイブルを読んだり、コーランを読んだり」

「矢つ張り僕達は頭が西洋的になつてゐるんだね。お經は何うも取つ付きが悪い」

「この上お經を読めば鬼の念佛だらう。純子さんも然う言つてゐた」

「しかし感心してゐるだらう？」

「うむ。同時に警戒してゐる。油断がならないつて」

「大丈夫だよ。もう寄り道をしない。いきなり大悟一番だ」

「僕も或程度までお相伴をしても宜い」

「西洋の方から先に片付ける。ガリラヤの湖畔でキリストに道を聴き、アラビヤの沙漠でマホメットから教へを受ける」

「しかし何方も東洋だぜ。佛教を初め、世界の三大宗教は皆東洋から起つてゐる」

「それだから僕は有望だと思ふんだ。佛教はもう遺傳的に頭の中にある。それへ基督教とマホメット教を併せて、打つて一丸と爲した宗教が日本から起るのかも知れない」

「世の中が進んでゐる。もう宗教時代ちやあるまい」

「いや、それは物質文明に目の眩んだ人間の獨斷だ。日本が世界に覇を唱へるのは物質方面丈けちや



ない。教祖はこれから立つ。精神的にも世界に號令したい』

『然う行けば、この上なしだけれど』

『考へなければいけないよ』

『兎に角、好い徴候だ』

『何が？』

『美千代さん時代から見ると、面目一新してゐるからさ。高尚な屈託は人間を向上させる。そんなことを考へてゐれば、心持が自然に落ちついて来て、學校の方も忠實になるだらう』

『相變らず些つほけな苦勞をしてゐる。僕は有らゆる宗教の蘊奥を窮めて、世界民衆の爲めに、打つて一丸にしてやりたいんだ』

『大きく出たね』

『僕が教祖さ』

『待つてくれ給へ』

『何だい？』

『君は極端から極端だね。一足飛びにそんな豪いものになつてしまつたんぢや、僕は制動手が勤まらな』

『ハッハ、』

『冗談ぢやないぜ』

『僕は何となく然ういふ方面に使命を持つてゐるやうに思ふんだ』

『好い加減にしてくれないと、側のものが心配する』

『若し本氣だつたら何うする？』

『簡單だよ。何處かの病院から醫者を呼んで来るばかりさ』

と僕は頂門に一針を打つてやつた。學校の勉強が漸くの男に大きなことは言はせない。

『厳しく来たね』

『しかし昨今の努力は認めてやる。僕は暑いから悉皆怠けてゐるけれど、君は實によく續く。これが學校の勉強なら素晴らしいものだぜ』

『然う言つてくれと純子に頼まれたんだらう？』

『そんなことはないよ。兎に角、君はやる氣になれば、何でもやれるのに、普段は横着を極めてゐるんだ』

『よく見てゐる』

『發心は無論結構さ。昨今のやうに凝り固まつてゐれば、まさか悪い方へは走らないだらう』

『大悟一番して、本當の人間になつてから出直す。まあ、長い目で見てみてくれ』

『それだけなら申分ないんだ』

「キリストでも、マホメットでも初めは皆誤解されてゐるんだからね」

「何うも少し傾向があるよ」

「ハツハ、」

「僕は君を悉皆理解してゐるんだから安心してくれ給へ」

「何う理解してゐるんだい？」

「君が日頃主張する通りさ。骨相學の説明が當つてゐるのかも知れない。君は圖抜けた長所があると同時に、まるで子供のやうなところがある。頭の中の釣合が取れてゐない」

「然ういふものだよ、教祖は皆」

「呆れて物が言へない」

「一寸誇大妄想狂つて感じがするだらう？」

と光岡君は自分で認めてゐるのだから仕方がない。

ケンさんは先頃の告白にも拘らず、時々やつて来る。尤も光岡君も僕もその場限りと言つたから、内容を誰にも洩らさない。光岡君はもうそんな問題は超越してゐる。しかしケンさんは氣になると見えて、頻りに僕の機嫌を取る。敵に秘密を握られてゐるのだから辛い。現に一度明らさまに念押しをしたことがある。

「時に稻垣君、人間、意志が弱いと駄目ですね。僕は汗顔に堪へないんです」

「何ですか？」

「この間のことです。卓爾君に打ち明けた不始末の一條です」

「あれはもうあれで事済みぢやありませんか」

「責任を轉嫁するんぢやありませんか、僕は意志が弱いから、龜山に乗じられたんです。今度こそは大悟一番しました」

「大悟一番が流行ですね。ハツハ、」

「あれは何うかお含みを願ひますよ。伯母さんや純子さんの耳に入ると、僕はもう出入りが叶ひませ

ん」

いふ

「御安心下さい。僕も男です」

「將來の出世にも關係することですから、何分宜しく。僕は矢つ張り今の中に身を引いて、他へ轉じ

る方が宜いかとも思つてゐるんです」

「光岡君があれば丈け保証したぢやありませんか」

「卓爾君よりも君ですよ」

「僕が何うしたんですか？」

「將來卓爾君の懐刀になるのは君に定つてゐます」

「僕は單に學校友達ですよ」

「しかし今更切れる關係ぢやないでせう。大將の信用が篤いんですから」

「さあ」

「將來の社長の後刀に睨まれたんぢや僕は逆も見込がありません」

「冗談でせう」

「いや、何分宜しく今からお願ひして置きます」

とケンさんは頭を下げた。

「そんな現實に遠い話は兎に角として、僕も男ですから、御安心下さい」

「悪いことをしてゐると氣が咎めるんです」

「決して他言は致しません。僕は一部始終を承はつて、君の立場に同情してゐるんです」

「然う理解して戴ければ、僕も有難いです。實際意志の弱い人間は仕方ありません。些つとも思つて

わないことを無理にやらされるんですから」

「この問題はもうこれで打ち切りにしませう。詰まらないぢやありませんか？ いつまでもこだはつてゐたんぢや」

と僕は光風露月の心境を示してやつた。しかし油断はしない。相手が相手だ。

斯ういふ次第だから、ケンさんは不始末を告白したけれど、その爲め少しも損をしてゐない。依然として、捲土重來の勢ひを續けてゐる。僕は押され氣味だ。光岡君が妙に悟りを開いて、一視同仁の

扱ひをするものだから、正直者は兎角歩が悪い。僕は光岡君丈けが頼みだ。然るにケンさんはお父さんお母さん趣町と要所々に悉皆取り入つてゐる。會社が引けると、趣町へ廻るか、此方へ寄るか、二つに一つと定めてゐるのらしい。

或晩、純子さんが趣町からケンさんに送られて歸つて來た。晝から遊びに行つて、つい引き止められたのだつた。

「陪乘の光榮に浴しました」

とケンさんが僕に誇つた。

「それは〜」

「晚かつたんだね」

と光岡君は相變らず趣町が嫌ひだ。

「今日は兄さんのお誕生日でしたから」

「ふうむ。あんな奴でも生れた日があるのかない」

まあ」

「これからは晩くなつたら待つてゐなさい。此方から迎ひに行く」

「済みませんでした」

と勝氣な純子さんは唇を咬んで、チラリと僕を睨んだ。僕は何ういふ意味か分らなかつた。

「ケンさんも、これからは送つて来ちやいけない。お互に慎みつてことがある」

「僕、姉さんに命じられたものだから、つい一も二もなく……」

「これからの話さ。此方のことは僕の考へに従つてくれ給へ」

「よし〜」

とケンさんはもう辯解しなかつた。僕は好い氣味だと思つた。

「兄さんは嚴格ね」

「うむ」

「私に丈け」

「さあ」

「然うよ」

と純子さんは少し不平のやうだつた。

「いや、この頃は自分を律することも甚だ嚴格だ」

「大悟一番の影響？」

「その邊かも知れない」

「確かに變つて来ましたよ」

と僕は言葉を挿む機會を得た。

加藤（ゆかり）

「純子さん、吉報をお傳へになつちや何うですか？」

とケンさんは僕を無視して話題を更へた。

「然うでしたわね。兄さん、兄さんのお喜びになることがありますのよ」

「何だい？」

「桂子姉さんのところが歸つて参ります。家の會社へ御轉任ですつて」

「ふうむ。到頭決心がついたのかい？」

「えゝ。麹町の兄さんが仰有いました。今日お定りになつたんですつて」

「有村君もイヨ〜女婚振りを發揮するのにか？これは案外だつた」

「でも家の人が家の會社に勤めるのは當り前でせう？」

「何處も然ういふ傾向らしい。お母さんに申上げたのかい？」

「はあ」

「兎に角、賑かになる」

と光岡君は無條件では喜ばない。何とか理窟をつける。有村君は純子さんの直ぐ上の姉さんのお婿さんだ。光岡君とは一高時代に同級だつたけれど、もう疾うに卒業して、一流會社の福岡支店に勤めてゐる。光岡君が始終褒めてゐるところを見ると、相應の秀才だらう。しかし既に姉さんを貰つてゐるのだから、僕は一向脅威を感じない。